
巨獣黙示録 G

はくたく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

巨獣黙示録 G

【Nコード】

N7424Z

【作者名】

はくたく

【あらすじ】

十五年の沈黙を破って、首都圏に再び現れた巨獣・G。迎え撃つのは、国連巨獣管理機関・MCMO所属の、三機の機動兵器。大地を揺るがして激突する超兵器と超生物。しかし、パイロットの一人、五代まどかは蘇ったGに不思議な違和感を感じていた。地球を支配するのは人類か、巨獣か、それとも……

ゴジラでウルトラマンをできないかなーってんでやってみました。それも、ロボット大戦的ストーリー展開で、平成ライダー的工セ科

学をまじえつつ……。しかし、作者は最近のアニメもゲームもまったくやってないんで、似たような展開や名称があったらごめんなさい。

§0 悪夢（前書き）

登場する巨獣は、有名なアレにそっくりですが、設定、性質その他、一応違うモノですのでファンフィクションにはしていません。

§0 悪夢

§0 悪夢

空が燃えているのだ。

真っ赤な炎を照り返して、夜空が赤く燃えているのだ。

目の前に広がっているのは都市だ。オフィス街らしき建物が整然と並んでいる都市だ。

だが、そこに人の気配はない。

乗り捨てられた車。

窓の割れたビル。

傾き、電線のはみ出たコンビニの看板。

燃える街路樹や家。

そして、大きな地割れに引き裂かれた道路……どれも見慣れない景色だ。

見渡す限り同じような廃墟が続くその風景は、ひどく殺風景で、つまらないものに思えた。

ビルの谷間には、先ほど自分が斃した敵が転がっている。

仰向けに倒れ、だらしなく口を開けた敵の屍体を、大した感慨もなくながめた。

周囲をさつきからうるさく飛び回っているのは、小型ヘリコプターのようなものだ。

特別に理由もなく、それを目で追ってみる。視界から消えかけたヘリを、首を回して追う。すると振り向かれたことに驚いたように、ヘリが急に速度を上げて逃げようとした。

本能的に歩いてさらにヘリを追う。さすがにあの速度には追いつけないが、遠くの敵を『……ヤメロ』倒す事は出来る。

尻尾から背中を力を入れれば、『ヤメロ！』こみ上げてくるエネ

ルギーがある。それを口から『ヤメロ!! ヤメテクレ!!』吐き出せば、かなり遠くの敵でも倒せるのだ。

少時的が小さいが……これだけ近ければ『タノム! ヤメロ!!』外すことはあり得ない。

目の前の火を吹き消すようなものだ。へりに対して何の感情も『ダメダ!! ヤメロ!!』持たないまま……怒りも、憎しみも、哀れみも、いらつきさえも感じないまま、『ヤメロ!! ヤメロ!! ヤメロ!!』口から一気にエネルギーを吐き出した。『ウワアアアアアア!!』

目覚めた時、彼は海にいた。

どうやら気づかないうちに眠ってしまったらしい。どちらへ進んでいたのか、分からなくなっている。

そういえば、クジラやマグロは泳ぎながら脳を半分休めて、眠ることが出来ると聞いたことがあるが、本当にそんなことができるものだろうか?

とにかく、進行方向が狂っているとまずい。しかし、あいにく今夜は星も出ておらず、目で見ただけでは方角が分からない。仕方なく、地磁気を使って方向修正を試みる。やはり、想定していた方角より、数度南にずれていた。

(……………急がなくては)

気持ちが焦る。

目的地までは、まだずいぶんあるはずだが、水温は急に下がり始めたようだ。寒流の影響のある場所まで来たのだろう。赤道直下からここまで、相当の距離を進んで来てさすがに少し疲れたが、今はそんなことを言っている場合ではない。

(もう二度と……繰り返させるわけにいかない)

強い決意を胸に、彼はスピードを上げた。

§1 VS(ヴァーサス)バリオニクス

§1 ヴァーサス VSバリオニクス

低いエンジン音が響いている。

海上自衛隊のP-3C哨戒機が東京湾上空を飛行しているのだ。

暗い。

月のない夜だ。

真つ暗な海面にところどころ、ぽつん。ぽつん。と、赤い光がわずかに揺れながら点滅している。

船舶航行用のブイだろうか。

それ以外には、遠くに揺らめく都市の明かりと、波間にゆらめく夜光虫の光だけが、かすかに海面と空の境目をふちどっているだけだ。

「まだ、探知できないのか!？」

操縦席へ向かって後席から、上官らしい男が声を荒げ、イライラした様子で叫んだ。

「まだです。」

しかし、夜間のことですし視認は不可能と思われまます。駆動音を出しているわけでもないのでから、浅場まで来なくてはソナーでも他の探知方法でも、見つからない可能性はありますし……」

「何を言っている!

発見できなければ、第一次防衛線も対応のしようがないんだ。国民に危険が迫っている時に、そんな頼りないことでどうするか!？」

「しし……しかし、奴が最後に出現したのは、もう十五年も前のことですから……」

あつ……感ありました！ 赤外線です！！」

眼下の海面を写した赤外線画像に、明らかに周囲の海水温よりも温度が高いエリアが浮かび上がった。

紡錘形をしたそれはまるで、巨大な魚の群れのようにも見えた。が、後方に長く伸びた細い尻尾のようなものをゆっくりと左右に振っていることから、それが単体の生物だとわかる。

それにしても大きい。

巨大なその影がゆっくりと進行するにつれ、画面のほとんどを25度〜30度を示すオレンジ色に染めていく。

「まさか、クジラじゃないだろうな!？」

「こんなでかいクジラはいませんよ!! 形状も違います! 第一こんなに体表温度が高くはありません! それに海面を見てください、吉田海曹。視認できます!!」

副操縦席の士官が叫んだ。

本来なら漆黒のはずの海面に、赤外線画像と同じような形状の影が青白く浮かび上がって見える。

「夜光虫だ。ヤツの体表面に付着した夜光虫が、刺激を受けて発光しているんだ……。」

言葉に従って眼下の海面を見た吉田海曹は、初めて見る巨大な影

にいい知れぬ戦慄を覚えた。すぐに副操縦士が作戦本部へ無線をつなく。

「こちらオライオン3号機。Gを発見しました。木更津沖約2km地点です。」

水中を市川方面に進行中。速度は2.2……いや、2.4ノット！」

自衛隊習志野方面隊作戦本部の無線機から、同じ音声が流れた。

「ヤツはどつやらこちらに来るぞ。千葉県上陸の可能性アリ。21:10(ニイイチヒトマル)習志野方面隊は対G作戦行動に入る。総員、第一種配備！」

「第一種配備、了解！」

司令官の指示を受け、ミーティングのために作戦本部に詰めかけていた各部隊長達が、あわただしく、しかし整然と前線へと帰って行く。

千葉県の臨海区域では、事前に配置されていた自衛隊の特殊車輛に火が入り、次々に動き始めた。

上陸予想地点の千葉縣市川市沿岸では、強力なサーチライトが海面を照らし、湾内を見渡せる防波堤上に、続々と陸上自衛隊東部方面隊第1師団所属の輸送車両が到着しつつあった。

「おい、やっぱりこっちに来るらしいぜ」

灯光車内では、サーチライトを操りながら一人の隊員が周囲に聞こえないよう、声を潜めて隣の同僚に言う。

「マジか！？ ヤバイな。このサーチライトで逃げてくれねえかな？」

「こんなもんで逃げるワケ無いだろ」

「富士演習の時には、クマが逃げていったぜ？」

「馬鹿。一緒にすんな」

「へへへ……」。

おいおい……っていつか見る。アレじゃねーの！？ 千葉県沿岸つつたつて広いのに、よりによってここに上陸かよー！！」

輸送車両から降りて配置についた隊員たちが固唾を飲んで見守る中、ライトの照らす海面に、岩のような青黒い塊が浮かび上がる。

「おい！ 見えたぞ！！ 気を引き締めろ！！」

部隊長から声が上がリ、訓練された隊員たちからも、思わず、どよめきが上がった。

海底を歩行していることを示すように、青黒い岩塊のようなものは、岸へ移動しながら一定のリズムで少しずつ大きさを増していく。水面上に現れた部分からは、青く光る夜光虫の混じった水をしたたらせている。その様は、まるで岩の表面が燃えながら融け落ちていくかのように見えた。

姿を見せ始めてからほんの数秒で、完全に海上に上半身を現した『それ』は、ゆっくりと見渡すように、体を回す。

そして、係留されていた小型船舶を押し分けるようにして、防波

堤上にその足をかけた。

都市の明かりを反射して、ピンク色に染まる曇り空に浮かび上がったその黒い影は、青白く煌めく海水を全身からしたたらせながら、非常にゆっくりと動き、地響きを立てて上陸した。

大地を踏みしめ立つその影は、港周辺の巨大なガスタンクや工場群を、さらに見下ろす高さだった。港湾に設置されている、荷役用のタワークレーンを遙かにしのいでいる。

高さは約100m、体幅は20数m。

それが、影のおおよその大きさであろう。

その高さと同じくらい長い尻尾がはるか後方の水面をたたき、巨大な水しぶきが上がった。

まるで土砂降りの雨のように、下水の臭いのする濁った海水が工場群に降り注ぐ。

その時、後方支援隊のサーチライトが、影の頭部をとらえた。

固まった溶岩のような皮膚。

上下に突き出た牙。

ライトを反射して赤く光る目。

背中には、不規則な形の大小の背びれが、尻尾まで三列に並んでいる。

全身青黒い岩のようでありながら、まるで炎か板状のサンゴのようにも見えるその背びれだけは、海のように透明感のあるブルーグ

リーンに輝き、夜光虫のそれとは違う薄緑色の光を放っていた。
額の中央部には、赤く光を反射する、まるで宝石のように半透明
でつややかな、楕円形の突起が見受けられた。

微妙な形態の違いは見受けられるが、全体のフォルムは確かに十
五年前、地上を蹂躪した巨獣・Gに違いなかった。

Gは、自分の周囲を囲むように展開した自衛隊の特殊車両を見渡
すと、大きく胸を反らし、天に向かって吠えた。

まるで大型の弦楽器を、高音から低音へ一気に弓を引き下ろした
ような声である。

低音の余韻が長くビリビリと周囲を震わせた。

思わず耳を塞ぎなくなるような轟音であったが、自衛隊員達は微
動だにせず、姿勢を低くしたまま耐えている。

その時、吠え声の余波をかき消すかのように、鈍い着弾音が響き
渡った。

巨大な影の頭部から肩にかけて、連続して激しい火花が散り、焼
けこげたような臭いがあたりに立ちこめる。

「Gめ、やっと、水上に出たわね」

国連巨獣管理機関・Mighty Creature Mana
gement Organization、略称・MCMO極東支
部所属の、五代^{ごだい}まどか少尉である。

彼女は上陸したGから十数？離れた海上から、上陸の様子をサテ
ライト連動の遠隔モニターで眺めていた。

搭乗しているのは、不思議な形状の銀色の機体である。飛行機と
も戦車ともつかないその機体は、ホバー機能で海面から1m程度の
空中に浮遊していた。

LK320-TB。コードネームはトリロバイト。

日米共同開発による対巨獣用戦略兵器であり、遠距離狙撃に特化したホバーマシンである。

前半分は平たいドーム状に見え、その両側には部隊のマークである、恐竜をモチーフにした青いエンブレムが描かれている。

全体のフォルムは後ろにいくほど細長くなっており、いくつもの関節を持つため、生き物の尻尾のようにしなやかに動かすことが出来るようだ。

バランスを保持するためか、時折、機体をくねらせていることからもそれが分かる。

この一見、巨大なカブトエビのように見えるその機体は、先程から強まってきた風で海面が激しく波立っているにも関わらず、まるで重力を感じさせないで、安定した姿勢を保っている。

「しかし……なんなのコイツ……何だか以前と感じが違う。本当に、あのGなの？」

十五年前……東京湾岸に上陸し首都圏を蹂躪して、まどかの両親を自宅もろとも焼き払った巨獣G。

その時、彼女が間近で目撃したGの禍々しい姿は、今も目に焼き付いて離れない。忘れようにも忘れられない、恐怖のイメージであった。

だが今、トリロバイトのメインモニターが捉えているその姿は、彼女の記憶しているGとは何かが違う。

背びれの形状。

その色彩。

額の赤い突起。

それ以外にも……

動き？

いや、目つき？

それとも………心配？

まどかは、上陸したGが醸し出している、そういった雰囲気、不思議な違和感を覚えていた。

「五代少尉！！ 応答しなさい！！ 五代少尉！？ ちょっとお！
！ まどか！ 何ぼーっとしてんのよ！！」

ヘルメットに内蔵された、通信機に飛び込んできた甲高い女性の声で、我に返ったまどかは、自分が寸時考え込んだことにようやく気づいた。

「G相手にあたしの戦闘ヘリ（アンハングエラ）の機関砲マシンガンじゃ、牽制にかなりやしないうてのよ！

狙撃担当のあんたがとどめを刺す役でしょ！！ しっかりしな！！」

AH200-JX・アンハングエラの搭乗者、新堂しんどうアスカ少尉だ。アンハングエラとは、彼等がGと呼ぶ巨大な生物の頭上を大きく弧を描いて旋回しているジェットヘリの名称である。

ジェットヘリとはいつても、そのサイズは米軍の攻撃ヘリAH-

64Aアパッチより二回り以上も大きい。にも関わらず、巨大なその機体を操っているのは、アス力ただ一人である。

単座式のコクピットには一切の窓がない。しかし全周モニターによって視界のほとんどをカバーしている上に、目標捕捉・指示照準装置であるTADSの発展型とも言える、音声認識システム併用による視線連動型火気管制によって操縦者一人での戦闘を可能にしているのだ。

赤外線誘導式対巨獣ミサイル24基と、50mm重機関砲を標準装備し、チタニウム合金製の複層構造の装甲によって、軽量化を図りながら、対弾性をも従来機より高めている。

これが対巨獣戦用のみに特化した、戦略攻撃ヘリ・アンハングエラだ。

アンハングエラの機体側面は、巨獣にとっての警戒色となる赤に彩られ、やはりトリロバイトと同じ恐竜デザインの黄色いエンブレムが描かれていた。

アンハングエラは先ほどから、Gを挑発するようにつかず離れず飛び回りながら攻撃を加えているが、Gはまるで小雨を気にするかのよう、時折、手で顔の周りを払うような仕草をしているだけだ。最大射程5,000mの重機関砲ですら、巨獣Gにとっては蚊が刺したほどにも感じていない様子だ。

「すつ……すみません！！ 第二射、いきますー！！」

まどかはターゲットスコープを起こすと、メインモニターのGをアップで捉えた。

遠距離のため、本来は機体のわずかな揺れで大きく照準がぶれるはずだ。しかし、遠距離狙撃モードに入ったトリロバイトは、ホバの出力を完全コンピュータ制御にするため、どんな場所、どんな条件下でも1ミリの誤差もなく、完全に空中に静止することが可能なのだ。

トリロバイトの背面に開いた二つの穴からゆっくりと砲身が伸び始め、モーターの駆動音に似た低い音が響き始めた。

リニアレールキャノン。

砲身がトリロバイトの全長の2/3以上を占める質量兵器である。先ほど、Gの頭部に火花を散らしたのはこの兵器だ。

機内で電気分解した水素と酸素の反応爆発で打ち出す紡錘形の金屬弾を、砲身の電磁場で加速する。技術的にまだ質量弾の着弾誘導システムが完成していないため、有効射程はせいぜい十数km距離であるが、その初速は音速に近い。

本来は重戦車型の兵器に搭載されることが多い兵器だが、ホバータイプのトリロバイトのリニアキャノンは、そうしたものより口径がかなり小さく、消費電力量も小さい。その代わりに質量弾とは言っても、数百gの小型弾だ。

しかし、それでも、通常の炸薬弾とは比べものにならない初速を得られる上に、火薬によるブレがなく遠距離でも命中精度は高い。

それはつまり、敏捷で警戒心も強く、それぞれ剣呑な特殊能力を持つ巨獣に、接近せずに攻撃を仕掛けることが出来るということでもある。

強力なホバー性能で機体を安定させ、海上や荒れ地、斜面などでも足場を選ばずに狙撃可能な高速移動型戦闘マシン。それがLK3 20-TB トリロバイトなのだ。

リニアキャノンは、十五年前の巨獣大戦ではトリロバイトのプロトタイプとも言える地上型装甲車両に搭載されていた。

当時は現在よりもかなり低出力であったにもかかわらず、二足歩行タイプの中型巨獣を一撃で斃していると聞く。

たとえ分厚い鋼鉄の壁であろうとも、難なく吹き飛ばすはずのリアキャノンをはじめいたGの皮膚の方が異常としか言えない。

しかし、軽い発射音の後、影も見せずに着弾した砲撃は、その前のもと同じようにGの皮膚に火花を散らしただけであった。多少体を揺らしたものの、二度目の砲撃もGには大したダメージはなかったようだ。

「な………なんで効かないのよ!!」

五代少尉は、思わず目の前のコンソールを拳で殴った。殴打の衝撃で、正面モニターにノイズが走る。

Gと二機の超兵器による戦闘を見守る自衛隊の戦車は、まだ威嚇射撃すらしていない。

配備されている13式戦車や対巨獣用プラズマ兵器では、最大の巨獣とされるGにリアレールキャノン以上に効果的な攻撃など出来ないし、なにより、下手に手を出してGが無差別に暴れ出しては、手がつけられないからだ。

「荒れるな五代少尉。」

ヤツは複製巨獣クローンじゃない。本家本元のGなんだ。この程度 of 状況は想定内だ。俺が行く」

まどかの通信機から、落ち着いた感じの男の声が聞こえた。

次の瞬間、海岸の大型倉庫を踏みつぶしながら大型戦車が姿を現した。

走行履帯キャタピラの下敷きになって潰されていくコンテナ車が、まるで出来の悪いミニチュアのように見える。

全部で八本の走行履帯は前後左右で分離しており、それぞれ4つの走行ユニットに組み込まれているのが分かる。本体前面には、巨大な二本の砲身が伸び、漆黒に塗られた車体には、やはり赤い恐竜のエンブレムが燃えている。

GX3000-W・ガストニア。全長五十m。全高十五m。サイズにして通常の重戦車の数倍、重量に至っては数十倍を誇る対巨獣専用兵器である。

「このガストニアの火力なら、さすがにGの皮膚でも耐えられないはずだ。新堂少尉、火線から退避しろ」

声の主は羽田晋也大尉。まどか達の所属する巨獣攻撃隊、チーム・エンシエントのリーダーである。

「しかし、羽田大尉!!!」

ガストニアの主砲は、200mm徹甲弾です! もし万が一にもさっきのリニアキャノンのように弾かれたら、周囲に多大な被害が出ます!!!」

「オレを信用しろ。たとえ弾かれても周囲に飛び散らないように、出来るだけ接近して、正面から当てればいいだけのことだ」

「そんな!? 危険です!!!」

アスカは羽田の腕を信じていないわけではない。

リニアキャノンが通じず、接近戦になる事態を予想していなかったのだ。

今、羽田の言った戦法を実践するということはつまり、たった今恐るべき強靱さを見せた巨大生物Gとの接近戦を意味する。そうすればいかに装甲の厚いガストニアでも破壊されるかも知れない。

「やらなければ、この町は守れん!!! 早く火線から退避しろ!!!」

「くっ……お気をつけて!!!」

アンハングエラはビルを盾にするように旋回しつつ、Gから距離を置いた。

だが、ガストニアとGを完全に一对一にしてしまっはまずい。足止めのためにも中距離からGの顔の周辺に対巨獣ミサイルを集中させる。

黒煙がGの顔の周囲に立ちこめた。Gの視界を少しでも奪えれば、羽田の戦いも有利になるはずだ。

「羽田大尉。トリロバイトも接近して援護します」

まどかの声だ。

遠距離狙撃では、乱戦になった時にガストニアに被弾させてしまう可能性がある。まどかは、通常弾の届く範囲まで接近するためにトリロバイトを発進させた。

「頼む」

羽田は短く答えると、ガストニアをGの正面に向かって微速で進めながら、機体前面に位置する二門の主砲を発射していった。

胸部正面に高質量徹甲弾（APHE）の連撃を受けたGは、ようやくふらついた。ミサイルの黒煙がGの上半身を覆い隠し、爆発の衝撃で周囲の建物が倒壊する。しかし黒煙が消えたその後にも、Gの皮膚には全くと言っていいほど何の痕も残っていない。

「馬鹿な！！ コイツの主砲まで効かないなんてどういうことだ！？ 一点集中で砲撃してみる。アンハングエラ！！ もう一度支援を頼む」

「了解！！」

その後も羽田は見事な射撃で、ほとんど同じ場所に連続して着弾していく。しかし十発近くの徹甲弾の一点集中にもGは耐えた。着弾で多少体組織が飛び散ったように見えても、下から泡のように新しい組織が生み出されて、体表面の様子は元通りになっていくのだ。

「新堂少尉！！ 五代少尉！！ 聞こえるか？」

迫撃は成功したが、標準火器では効果が見られないようだ。これ以上の砲撃は、周辺への被害の拡大も考えられる。やむを得ず格闘戦を試みる。」

「羽田大尉、待ちたまえ。」

ガストニアのサブモニターに、士官の制服を着た人物が映った。

「焦ってはいけない。ガストニアだけで格闘戦を挑んでも、勝ち目はないぞ。たしかにガストニアの質量はGと同等だが、運動性ははるかにヤツが上だ。」

「樋瀉司令！！ やらせて下さい。このまま砲撃を続けても、ヤツの進行を止めることは出来ません。」

この地域の住民は避難していても、内陸への進行を許せば人的被害は避けられません！！

ガストニア単機でもやれます。スピードでは劣ってもパワーでは負けない設計がされているはずですよ」

「……やむを得ん。接近戦は許可しよう。」

ただし、ガストニアだけではダメだ。機動性の確保のためにトリロバイト、アンハングエラの二機と合体するんだ」

「しかし、我々は実戦での合体経験がありません。夜間の市街地で状況も視界も悪い。失敗すれば、却って危険な状況に陥ります。」

「君たちはその為に訓練してきたはずだ。」

今、ヤツに対抗できる手段がそれしかないのなら、やるしかあるまい。目視ではなくサテライトシステムを使って自動誘導で合体するんだ」

「了解。^{ラジヤ}チーム・エンシエントは合体モードに入ります。」

聞こえていたな？ 新堂！ 五代！」

『了解』^{ラジヤ}

通信を傍受していた二人の声が重なった。

重戦車・ガストニアは、Gの目前から急速後進し始めた。急に回転数を上げた鋼鉄の履帯が、周囲の瓦礫を飛び散らせ、強力なヘッドライトさえも粉塵で見えづらいほどになる。

Gから十分な距離をとって平坦地へ移動し、合体可能な状況にならなくてはならない。

戦闘ヘリ・アンハングエラは威嚇攻撃を繰り返しながら、ガストニアと反対の方向へGを誘導する。ガストニアを追おうとしたGは、アンハングエラの機銃を顔に受けて、うるさそうにしな がら方向を変えた。

トリロバイトはその間に湾内に到達し、高度を上げてガストニアの後方へ迫る。

攻撃対象を見失って唸るGから約1？離れた位置で、ちょうど三機が直線上に並んだ。

「よし！ ガストニア・羽田、スタンディング・バイ」

「アンハングエラ・新堂、スタンディング・バイ」

「トリロバイト・五代、スタンディング・バイ」

「オールグリーン！！ セーフティロック 安全装置解除！！ 合体するぞ」

合体モードへの移行は、透明プラスチックに覆われたレバースイッチだ。羽田はそのプラスチックを、拳を握った手でたたき割ると、一気にレバーを引き下げた。

途端に、コクピットの照明がすべてグリーンに変わり、電子合成された女性の声流れ始めた。

『グラップルモードへの変形が始まります。搭乗者は衝撃に備えて下さい。』

繰り返します。グラップルモードへの変形が始まります。搭乗者は衝撃に備えて下さい』

ガストニアの後方履帯が左右に広がり始め、後部車幅が一回り大きくなった。そして上部ユニットの後部装甲が折りたたみナイフのように開くと、そこに空洞が姿を現し、ドッキングアームが数本伸びた。

そこへ、ホバー推進の勢いを保ったまま、トリロバイトが突っ込む。

下面数力所のフックが、ガストニアから伸びたドッキングアームのフックと咬み合う。

トリロバイトが完全に一体化すると、合体の確実性を確認するかのように、長い尻尾状の突起がうねうねと動いた。

さらに、前方の走行ユニットの長楕円球の装甲部分が、回転しながら伸びてマシンアームとなっていき、その先端からジャックナイ

フのように鋭い爪が飛び出した。

次に、二本の主砲の真ん中の位置から、機体の上部が縦に割れ、前面にドッキングポートが現れた。

アンハングエラは、そのドッキングポート上に、ゆっくりと降り立ち、ガストニア側から立ち上がった隔壁が機体を抱え込むようにして、アンハングエラとの接続部を覆い隠していく。そして、ガストニアの機体下部から立ち上がった分厚い装甲が、アンハングエラを支えていく。

アンハングエラのローターが回転をやめ、折りたたまれるようにして機体に収納されていくと、すべての接続が完了し、うずくまった恐竜のようなシルエットが完成した。

その恐竜が、ゆっくりと身を起こす。

そこに現れたのはGとほぼ同じ大きさをした、二足歩行の恐竜によく似た巨大ロボットであった。

黒いガストニアの基本色に、トリロバイトの銀とアンハングエラの赤が模様のように入っている。その鮮やかな色彩は、巨獣に自分を敵と認識させて引き付けるためのものだ。

これがMCMO極東支部所属、怪獣攻撃隊チーム・エンシエントの最新機動兵器、MG-？バリオニクスである。

様々な性質、特殊能力を備えた巨獣に対して、戦闘機や戦車で立ち向かってても、有効な兵器が選択できない場合は少なくない。しかし、重量級のロボット兵器による格闘戦であれば、少なくとも物理的に侵攻を阻止できる可能性は高い。また、弾薬の爆発や破片による周囲への被害も最小限に食い止めることが出来る。

こうした理由から人類は、十五年前の巨獣大戦を契機に、このバリオニクスのような大型機動兵器の開発を進めてきたのだ。

今回は、対巨獣戦での初陣といえる。

「よし、合体完了！ グラップルモードに移行する！！」

羽田の握る、左右の操作レバーを挟むように立ち上がってきた金属製のハンドソケットが、両腕を包み込む。足元からは、やはり二つに分かれて立ち上がってきたブーツソケットが、両足を膝上まで包んだ。座席が後方へ引き、コンソール類もすべて壁に収納されて、羽田は丸い空間に手足をソケットに包まれて立ち上がった。

F T S ・ファイターレースシステム。

巨獣との格闘戦を想定した、操縦システムである。

搭乗者の動きを、バリオニクスの操作システムがトレースすることで、メインパイロットがバリオニクスを操作して戦う。

それをサブパイロットの二人が重火器や特殊アタッチメントでサポートするのだ。

バリオニクスのカメラアイが緑色に光り、Gをとらえた。羽田の目の前のメインモニターには、サーチライトに照らされた、巨大な岩山のようなGの姿が正面に映っている。

「行くぞー！！」

羽田は迷わず接近戦を挑んだ。

三機が合体することで、Gの質量を確実に上回っている上に、三機の原動機をそれぞれ各部アクチュエータのパワーアシストに回すことで、機動力もパワーも数倍に跳ね上がっている。格闘戦でGに後れをとる要素は何もないはずだった。

Gは合体の間、攻撃を中断した羽田達を無視するかのように、国

道へ向かう広い搬送路をさっさと歩き出していた。その行く手を阻むかのように、倉庫を踏みつぶしながらバリオニクスが立ちはだかる。

「どこへ……行く気だッ!!」

肩口から体当たりしながら羽田が叫ぶ。

自分と同等クラス以上の質量にぶつかられ、さすがのGも数歩後退した。しかしその両足は大地をしっかりとつかみ、姿勢はいささかも崩れない。

「くそっ!!」なんて化け物だ。スクリューバイトを仕掛ける。新堂、やるぞ」

「了解!!」

スクリューバイトは、相手に噛みつき、頭部を首ごと回転させて引きちぎる技である。しかし、頭部には合体したアンハングエラがある。

F T Sでは噛みつきの動作までトレースできないため、ターゲットイングとアクションには頭部に位置するアンハングエラのサポートが必要だ。また、頭部ごと回転しないように、攻撃前にコクピットが背頸部にスライドするため、アンハングエラのパイロットにも強い衝撃がかかる。

本来の生物ではあり得ないような角度にバリオニクスの頸くびが動き、その名称の元にもなった、巨大な顎がGに迫る。最も皮膚が薄いであろう喉笛を狙って繰り出した必殺の噛みつき攻撃は、しかしGの腕であっさり防がれた。

喉笛の代わりに二の腕に噛みつかされたバリオニクスは、回転攻撃を仕掛ける前に、Gの体の回転で逆に振り回され、無防備な側面

をGの目前に晒すことになった。

「いかん!!」

羽田は体勢を立て直そうと左足を前に出したが、埋め立て地の地盤はバリオニクスの重量を支えきれず、そのまま横倒しになった。

「く……やられる」

バリオニクスはほぼ無防備に地面に倒された。

凄まじい地響きが周囲の建物を揺らす。必死で操作して立ち上がろうとしながらも、当然さらに攻撃が加えられるものと、搭乗者^{パイロット}全員が覚悟した。

しかし、羽田がメインモニターに再びGを捉えた時そこに映されたのは、あの特徴的な後ろ姿であった。Gは何事も無かったかのように、転倒したバリオニクスの横を素通りして、再び国道の方へ歩き出していたのだ。

「な……なぜだ？」

羽田は呟いた。これまでのGの行動原理からすれば、考えられない反応であった。目の前に自分を攻撃した敵が転がっているのに、とどめを刺さずに去るなど、あり得ることではない。

サブモニターに厳しい表情の樋瀉司令が映る。

「羽田大尉、何をしている!! チャンスだ。Gを後方から追撃しろ!!」

「了解……しかし……」

羽田は言いよんだ。後ろからの攻撃を卑怯、と思ったからではない。相手は人間ではないのだ。隙を突き、弱点を突いて斃さなくてはならない敵である。

いや、たとえ相手が人間であろうとも、正々堂々などと言っているのは、戦場では幾つ命があっても足りない。

だが、Gは少なくとも上陸してから何もしていない。自分達への攻撃はおろか、周囲への破壊活動も一切していないのだ。そんなGを攻撃する理由は何なのか、その事に羽田はふと、疑問を抱いたのだ。

「ためらっている場合かね!! このままGの侵攻を許せば、内陸部の都市まで被害が及ぶぞ!!」

「了解!!」

羽田は自分の中に芽生えた疑問を、それでも今は吹っ切ることにした。

少なくとも十五年前に東京へ上陸したGは、他の巨獣と戦い、都市を破壊し、巻き添えになった数万の人を殺したのだ。その仇を討たなくてはならない。

それに樋瀉の言う通り、これ以上内陸部に進ませてしまえば、Gがどういう行動をとろうとも人的被害は避けられないだろう。

人間の営みを守るためには、どちらにせよ戦う以外に道はないのだ。

ゆっくりと遠ざかるGの後ろ姿に向けて、羽田は空手における前羽の構えをとった。

それに合わせてバリオニクスも同じ構えをとる。両腕に当たる大型マニピュレータの先端に付属した長大な爪状のアタッチメントが、さらに仕込みナイフのように倍以上に伸びた。

その姿は、あたかも目の前に八本のナイフをかざした暗殺者のように見える。

本来、前羽の構えは、空手では防御主体の構えであるが、ことバリオニクスについては言えば、両腕の武器を有効に使うために、もっとも適した構えになる。

コクピットの羽田は、やや前傾姿勢の体勢から、一步踏み込んで抜き手を放った。

羽田の動きを伝えられたアクチュエータが各関節部で連動し、数万倍の力と速度に変えて打撃を繰り出す。バリオニクスのマニピュレータは、肘部で外れ、チェーンを引きずりながら高速でGの背中に向かって突き進んだ。

羽田が加えたわずかな手首のひねりが、そのまま爪状のアタッチメントの回転となってGの皮膚をえぐった。

Gの肩口に鮮血が散る。

超硬質鋼で作られたナイフ・クロー。

その刃は鋼鉄をも紙のように切り裂く硬度を持つ。しかし、初めて大きな傷を負いながらも、Gは何の痛痒も感じないかのように歩みを止めようとはしない。

しかも、Gの表皮に傷を付けたものの、ナイフ・クローはそれ以上深く刺さることはなく、Gの斜め右のビルに命中した。

ナイフは鉄筋コンクリートの建造物を、まるで豆腐でも切るかのように、刃の形そのままに切り刻み、地面に突き刺さる。ナイフが弱いのではない。恐るべきは、Gの皮膚の強靱さと言えた。

バリオニクスの肘先からナイフ・クローまでは、チェーンでつながっている。そのチェーンを巻き上げながらバリオニクスはGに追いついていく。

「振り向きもしない……か。舐められたモノだな」

長い軍人生活で、ここまで敵に相手にされなかったことはない。

普段は冷静な羽田も、少し自分の頭に血が上ったのを感じていた。

「クローまではじかれたっつての!？」

なんで生物の皮膚がアレを通さないのよ!？ 金属並み……いい

え、金属以上の硬度だっつていうこと!？」

まどかが叫ぶ。

「いえ、金属並みっつてわけじゃない。

硬質ゴムのような組織が何層にも重なり、その隙間に体液が緩衝材のように充填されているのよ。その分厚い皮膚構造が、体内へのダメージを軽減してしまっているんだわ」

アスカが、Gの傷口から皮膚構造を解析したCG画像を見ながら答える。

「それなら、その皮膚構造を突き破るまで、攻撃するしかないな!

何より……こっちを向かせないと戦い自体が始まらない!！」

叫びながら、さらにGの背後に迫る。今度は距離が近い。

羽田は右腕を振りかざすと、ナイフ・クローを先ほどの傷口に突き刺した。

「な……何!！」

明らかに傷口に命中したはずのクローは、しかし今度はまったく傷を与えことなく弾かれてしまったのだ。しかも、先ほど飛び散った皮膚の下からは、すでに新しい組織が盛り上がってきている。

「なんだ!？」

こんな高速で再生しているというのか？ そんな報告は聞いたことがないぞー！」

「羽田大尉！」

再生ではありません。皮下に押し込まれていた体液が、次々に吹き出しながら固化しているようです！！

でも……………これではキリがありません……………」

分析担当のアスカの声に、恐怖の響きが混じる。羽田もそれを聞いて戦慄した。

「来るぞー！！」

羽田の声と同時に、激しい衝撃がバリオニクスを数十メートル後退させた。

Gの尻尾が、胴のあたりに直撃したのだ。

「噛みつかれたぞー！！」

度重なる後ろからの攻撃に、さすがに怒ったのか、ついにGが振り向き襲いかかってきたのだ。右腕の操縦システムにセフティロックがかかり、羽田の右ハンドソケットのフィードバック機構がシャットダウンされた。

一気に腕部アクチュエータに過負荷がかかり、左サイドのサブモーターがブラックアウトする。

次いでエマーゲンシーコールがけたたましく響き、電子合成された音声で、危険を知らせ始めた。

『右、メインアームノ負荷ガ、限界ヲ越エマス』

『アーム接続部二、限界以上ノ負荷ガ力カツテイマス。速ヤカニ、負荷軽減ノ措置ヲトツテクダサイ。繰り返シマス……………』

次第に大きくなる警報音で、耳がおかしくなるかと思った瞬間。

バリオニクスの右腕があっさり引きちぎられた。各搭乗者の目の前のモニターにノイズが走り、味わったことのない強い衝撃がバリオニクス全体を揺らす。

「ば…………馬鹿な！ こんな簡単に…………」

外部情報を伝えなくなった左サイドモニターに浮かび上がった、構造模式図をにらみながら、呆然と羽田がつぶやいた。模式図には、全身の構造図が緑色の線で描かれ、左腕から肩にかけての破損部分が 赤く点滅している。

バリオニクスは最新兵器だ。

その強度は、Gはもちろんのこと、これまでに現れた他のすべての巨獣の力をも凌駕するように考慮して設計されているはずである。それが、まるで段ボール製の玩具のように、簡単に食いちぎられてしまったのだから、羽田の驚愕も当然である。

しかし、呆然としている暇はなかった。電子合成音が、今度は別の場所の異常を伝え始めたのだ。

『右脚部二、異常負荷ガ力カツテイマス。速ヤカニ、負荷軽減ノ措置ヲトツテクダサイ。繰り返シマス……………』

「新堂少尉！？ 右脚部の駆動系がおかしいぞ！！ フロントアクチュエータ破損だと！？」

我に返った羽田が叫んだ。

腕の次は、足だというのか。しかし、Gがあまりにも接近した状態であるため、格闘戦モードの羽田には、かえってGの様子が分からない。

「大尉！！　ダメです。もぎ取られた右腕を、関節部に突っ込まれたようです。右脚部は動きません！！」

「くそっ！！　全速後退だ！！　いったん離れて、体勢を立て直すぞー！！」

羽田は叫んだ。左脚だけでも、なんとか移動は出来る。少し距離をとればリニアキャノンや主砲で攻撃も可能だ。

しかし、その時Gのとっていた行動は、羽田の予想を超えていた。

「ダメです。

左腕も……破壊されます……！！」

Gはバリオニクス左腕をつかむと、無造作に逆方向に折り曲げた。

エマーゼンシーが騒ぎ出す間もないまま、左のフィードバック回路もシャットダウンし、左腕はただだらりとぶら下がる。左サブモニターが沈黙し、次いで、左脚部にもエマーゼンシーが光った。Gはバリオニクスの移動力を完全に殺^そいだのだ。

「頸部も損傷。方向変換できません！！　きゃ……」

叫ぶアスカの声にノイズが入って、通信が切れた。全体の破損は予想以上のようだ。

「それほどの知能を持っている……ということなのか？」

羽田は、愕然とした。
四肢をもがれ、ほぼバリオニクスの機動力は殺されたということになる。

「うわあっつー!!」

フィードバック回路からの逆流で、羽田の体に電流が流れ、腕部の操作用ソケットから煙が上がる。仕方なく上半身のトレース操作システムを完全に解除した。

格闘戦モードが強制終了され、目の前のメインモニターにGの姿が映し出された。

「笑って………いるのか？」

羽田がつぶやく。

Gはバリオニクスを見つめて立っていた。

声を発したわけでも、
体を揺すったわけでも、
ましてや、口元をゆがめたわけでも、ない。

しかし、動けなくなったバリオニクスを見下ろすその姿は、羽田には、まるで嘲笑しているかのように思えた。

ほんの数秒。

Gがバリオニクスを見下ろしていたのは、その程度の時間だっただろう。

そしてGは何事もなかったかのように、地響きを立てながら鉄の

塊と化したバリオニクスの横を通りすぎていった。

「ちく……………しょうっ！！」

手も足も出せない状態である。

激高した羽田が、目の前のモニターに映るGを殴りつけた。しかし、Gは行動不能のバリオニクスに、一瞥もくれようとはしない。

「なんで……………破壊していかないんでしょう……………？」

まどかの疑問ももつともだった。

十五年前……………巨獣大戦以前までのGの行動原理は、あくまで破壊衝動であり闘争本能であつたと聞いている。

それならば、動けないバリオニクスを完膚無きまで、破壊し尽くしていけばいい。

しかし、それどころかGはバリオニクスを放ったまま、しかも周囲の建造物にさえ目もくれずに、江戸川沿いの道を黙々と上流へと歩いていく。

まるで、そちらに本当の目的地があるとも言わんばかりだ。

『大丈夫か？ 羽田大尉』

通信機から、冷静な声が聞こえてきた。

左サイドのサブモニターに、作戦本部の樋瀉大佐の顔が映る。

「大佐、申し訳ありません。」

バリオニクスを破壊されました。これ以上の戦闘は不可能です」

『大尉のせいではない。』

私も、Gの力を見誤ったようだ。

こうなれば、ヤツの予想進路上に避難勧告を出して、被害のない場所までおびき寄せ、自衛隊の全火力を集中して雷撃戦を展開するしかないだろうな』

「樋瀉大佐。ヤツは上陸以来、一度も熱線を吐いていません。今も……………」

羽田の声に悔しさがにじむ。

巨獣Gは自身の最大の武器、粒子熱線を一度も放っていないのだ。

粒子熱線は、Gが口から光線状に発する重粒子の奔流だ。

生物であるはずのGが、どうしてそのようなものを吐けるのか？

一個体のみが存在である上に、近縁とされる生物種が一切見つかっていないGは、それゆえ、当然一度も解剖されたことがない。

つまりGの体内構造は推測するしかないのだが、粒子熱線発射時に背中の子ンゴ状の突起物が燐光を発することから、尻尾から頭にかけて背中に管が通っていて、そこを通過させながら重粒子を加速していき、口から発射するものと考えられている。

空気中に発射された重粒子は、同時に発射された体液と反応して超高温になり、小爆発を連鎖的に起こしながら更に自律加速を繰り返して目標に到達し、対象物を破壊する、まさに最強の武器だ。

しかし、Gは、それほどの破壊力のある武器を一度も使わずにバリオニクスをあしらったのだ。

つまり、まったく実力を出さないままで……………。

『そうだ。しかもどうやら、衛星で確認すると上陸前から進路はほぼ一直線だ。このまま江戸川沿いに進むと仮定すると向かう先は…

……………』

「市川……松戸……葛飾区……水元公園……？」

羽田はかろうじて生きていた衛星ナビゲーションシステムを呼び出し、画面上をなぞりながら、進路を予想した。

「水元公園の近くと言えば……国立遺伝子工学研究所がある場所だな」

「遺伝子工学研究所？　そこがヤツの目的地だというのはですか？」

羽田の問いに、樋瀧大佐はほんの少し逡巡してから言葉を継いだ。

「それは分かん。しかし、あそこには……Gの遺伝子を受け継ぐもの……その遺骸がある。もしかすると、何か関係があるかも知れん。」

とにかく、予想進路上の市民を急いで避難させる必要がある。申し訳ないが君たちは、そのまましばらくバリオニクス内で救出を待ってくれ」

「……了解」

羽田の返答は、これまでにないほど暗かった。

「五代、新堂、話は聞こえたな。漏電や誘爆の危険がある。全部の動力を切って救助が来るまで待機だ」

「了解！」

通信を終えると、羽田は救助信号と外部モニターの一部を残して、

動力を切った。

そして、すべての通信回路が遮断されたことを確認して、羽田は自分の頬を思い切り殴った。口の中に鮮血の味が広がる。

羽田は自分自身が許せなかった。

自分の戦闘の結果、スクラップと化した乗機の中で、しかも自分自身は無傷で長時間救出を待つ、というのは、彼にとってはそれほどの屈辱であったのだ。

*

「ぶつっ……」

通信を終えたG対策本部司令、樋瀉幸四郎ひがたこうしろうは、背もたれに寄りかかり、深いため息をついた。現時点で最強の新兵器と位置づけていたバリオニクスが、まさかGに一蹴されるとは、思ってもいなかったのだ。

羽田大尉にはああ言ったものの、雷撃戦で仕留められる公算は少なかった。そもそも、どうやってGを人家が少なく、かつ狙いやすい地域までおびき寄せればいいのかさえ、分からないのだ。

その時。また通信回路から呼び出しがかかり、作戦室のメインモニターに四十代と見える白衣の男が映し出された。そして、女性オペレータの取り次ぎを待たずにしゃべり出す。

「樋瀉司令、バリオニクスが敗北したそうですね」

「これは教授。せつかくあなたの予想通り、ヤツが現れたというのに申し訳ありません。」

「すぐに、次の作戦を練ります」

「申し訳ない。私の予想が正しければ……いや、こうなつては正しいとは思えないのだが、やはり、Gの狙いは、遺伝子研究所の巨獣遺体でしょう。なんとか、そこに着くまでにGを倒さなくては、大変なことになる」

それを聞いた樋瀉は、目を丸くしてモニター上の男を見つめ返した。

「馬鹿な。そんなことは初めてお聞きしましたよ？」

私は、このまま進ませて、人家の少ない地域で総攻撃を仕掛けるつもりでしたが……」

白衣の男は眉根を寄せ、身を乗り出して、懇願するように頭を下げた。

「……それでは困ります。どうしても、Gを巨獣遺体と接触させてはいかんのです」

「教授……十五年前、大きな傷を負って深海に沈んだはずのGの復活といい、その上陸を予想されたことといい、我々は知らされていないことが多い。事情を話していただけませんか？」

「……分りました。話せる限りのことは、お話ししましょう」

教授と呼ばれた白衣の男は、ぼそぼそした声で話し始めた。

§2 海底の巨獣王

§2 海底の巨獣王

暗黒であるはずの深海に星が見える。

発光生物などではない。

星は不思議に規則正しく並んでいたり、寄り集まっていたりするのだ。

星に少しずつ近づくにつれ、瞬かないその星々は建造物から漏れる明かりであることが分かってきた。

海底に、まるで一つの集落でもあるかのように、いくつも明かりがともっているのだ。

水深二千m。

東京湾から百数十？離れた、御蔵島近海の海底である。

そこには、お椀を伏せたような建造物が、いくつも海底に作られていた。

そうした半球型のドームは、大小十数個あるようだが、それぞれ通路でつながり合わせられており、一番大きな中心のドームは、海面の浮遊式基地メガフロートと透明なフレキシブルパイプで接続され、その中を上下する浮動式エレベーターの姿が見える。

海底に作られた、月面基地さながらのこの施設は、WHO、世界保険機構所有の生体研究所であった。

「シートピアアカデミー」と名付けられた施設である。

なぜ、このような場所に研究所が建設されたのか？

その答えとなるものは、研究所から数百m離れた海底に横たわっていた。

十五年前、地上を蹂躪した「G」と呼ばれる巨獣の遺体である。光の差さない海底でまるでうずくまっっているかのような姿勢で、永遠の眠りにについている。その体表がわずかに燐光を放っているのは、表面に付いた発光微生物のせいだろうか。

Gの下半身は、まるで生きているかのような完全な形状を保っている。

しかし、前頭部から背部にかけては、大きく欠損していた。上顎から頭、首筋、背中にあるはずのサンゴ状のヒレ……これらは、まるで内部に爆弾でも仕掛けられ、破裂したかのように激しく損壊し、あるいは完全に失われていた。

その状態では、とても生きてはいないことが一見して分かる。無敵の巨獣王と恐れられた「G」の最期の姿であった。

よく見ると、そのGの体表を人工の光が動いている。

深海の間が深すぎて見えづらいが、銀色の小さな機械が這い回っているようだ。

テレビカメラと昆虫のような金属製の歩行脚を備えたそれは、巨大なGの遺体にとりついた、寄生生物のようにも見えた。

「雨野君、やはりこの傷口からサンプルを採るしかないようだな。」

細胞学研究室の主任教授、八幡啓介は、銀色の機械……調査用ロボットのプロポを操作する白衣の女性に声をかけた。

目の前の画面上には、Gの頭部の傷口の、無惨に引き裂かれた白い肉が写っている。

「やはり表皮でなくとも、組織自体がかなり固いですね。弾力性も

あります。

特殊モリブデン鋼のドリルアームがほとんど通りません。でも、
個体としては完全に死んでいる状態なのに、細胞だけは生きている
部分があるっていうのは、どういう事なんでしょうか？」

手にしたコントローラを器用に操りながら、白衣の女性………研
究助手の雨野いずもが言う。

「この深海の水温が、平均4 前後と、一定して冷たいというのも
あるが……それがG細胞の特性といってもいいかも知れん。

細胞の一つ一つが、無制限な増殖能を保持しながら、全体と
しては個体としての生体機能を維持し続ける………まあ、個体が死
んでも細胞が生き続けているってのは皮肉な話だな。」

「あ、やっと体内の空洞にドリルが到達したようです。血液が……
……」

モニターに映った、マニピュレータのシリンジ内に、赤い液体が
流れ込んできている。

「そうか。心臓の筋肉だけでなく、そのまま血液も採取してくれ。
新方式の培養細胞に利用可能かもしれん。」

「精が出ますね。」

そこへ、後ろから声がかかる。

振り向くと、ドアの前には一人の初老とおぼしき白人男性が立っ
ていた。でっぷりと太った体、黒縁の眼鏡に真っ白な口ひげをたく
わえた、愛嬌のある顔立ちが彼らの見慣れた人間だった。

「これはウィリアム教授」

八幡は笑顔で迎えた。

機械工学研究室の客員教授、ウィリアム・テンブル博士である。アメリカ国籍で、機械工学のみならず生物学にも深い造詣を持ち、新思想の多足歩行制御システムの開発者でもある。

このラボでは、対獣用の機械兵器の開発と、それにまつわる神経細胞と機械装置の連結に関する研究をしているが、一方では他の研究室の依頼で、研究所における実験装置の開発も手がけているのだ。

「八幡先生、今度のロボはなかなかでしょう？私の自信作ですからね」

ウィリアムは得意げに流暢な日本語で話しながら、大きな体を揺すって笑う。

「ええ、かなりなものです。

耐水圧性能も向上していますし……10mも伸びる、この特殊モリブデン鋼のドリルアームなら、今度こそGの心臓の細胞が手に入りますよ。」

「それなんです、八幡先生。どうして先生は、Gの心臓にこだわるのですか？」

「私の仮説は、まだ構想段階に過ぎないのですが……教授にならお話ししましょう。ウィリアム教授は、細胞内共生生物というものをご存じですか？」

「ええ、聞いたことはあります。ある種のダニや吸血昆虫の腸内細

胞に、細菌が共生して、栄養の摂取を手助けしている……そんな論文を読んだことがありますね。」

「そう、それです。しかし、実は昆虫を始めとした節足動物全般に広く見られる現象でもあるのです。」

また、それに近い現象は、植物はもとより、軟体動物から原索生物であるホヤ類まで、広く見られることも分かっています。」

「ほう……」

ウィリアム教授は、自分で椅子を引き寄せて八幡の前に座ると、興味深そうに目を輝かせながら身を乗り出した。

「しかし、脊椎動物になると、こうした現象は基本的に確認されていない。ミトコンドリアがこうした細胞内共生生物由来とする説は有名ですがね。」

「つまり、G細胞に、それと同様の現象が、見られる可能性がある」と?」

「そうです。」

以前から、Gの特殊性はそのDNAにあるだけではなく、細胞内構造物であるオルガネラが、異常な生命力や再生能力、そして強靱な組織構造を支えているとする説が有力でしたね?」

「ええ、そう聞いています。」

「事実、そのオルガネラを体内に取り込んで巨大化した生物が現れたこともありました。結局は自滅したようですが……」

ウィリアム教授が軽くうなずくと、八幡は説明を続けた。

「Gの細胞を取り込んだあの生物は、なぜ、最終的に自滅したのか……考察をしてみたいです。」

で、仮説に過ぎないんですが……もしかすると、オルガネラ様態をしていても、本当はオルガネラではなく、退化した細胞内共生生物じゃないか……と考えたのですよ。

しかし、ミトコンドリアや葉緑体ほどには共生の歴史は長くないはず。つまり完全には退化していないと仮定すると、もしかするとGの体内のどこかで、細胞内共生細菌の姿で現在も残っている可能性があると推測しました」

「なるほど、で、個体発生のもつとも初期の段階から存在している心臓……というわけですか」

「ええ、安直な推理ではありませんがね。」

皮膚や筋肉のサンプルは採取されていますが、これまで内胚葉由来のG細胞サンプルはなかったですから。

しかし、脳や脊髄はあの通り破損していますし……今もかすかに動いている心臓ならば、と考えたのです。ただ、どれだけ規格外でも脊椎動物ですから、もし細胞内共生細菌が発見できれば世界初となりますがね。」

八幡は少し自慢げに、モニターを見やった。

「ええっ!?! Gの心臓は、まだ動いているんですか?」

プロポを操るいずもが素っ頓狂な声を上げる。

「なんだ、君は知らなかったのか。なに、心配はいらんよ。」

いくら心臓が動いていても、欠損してしまっている器官が再生することはできない。つまり、Gがよみがえる可能性は、ほぼゼロだ」

八幡の代わりにウィリアム教授が答えた。

「そう。Gは脳幹から脊髄にかけてと、大脳の半分近くを欠損している。この遺体が確認された十年前から、傷の状態がまったく変化していない以上、Gの復活はあり得ないだろうな」

そう言う八幡の表情は、少し残念そうに見えた。

もしかしてこの人は、生きたGを研究したかったのかも知れない。いずれもがそう思った時、電子音が鳴った。

「あ、八幡先生、自動操縦にしていたサンプリングロボットが帰還しました。」

いずれもの手で、ロボットの帰還を知らせるアラートが鳴っていたのだ。

「よし。さっそく細胞サンプルを見せてもらうかな」

八幡がサンプリングロボットの帰還した外部ハッチに圧縮空気を送り込み、排水を始めたとき、あわてて飛び込んできた人物がいた。

「先生！！あんな実験をどうして許可されたのですか!？」

いきなり食ってかかられた八幡教授は、ハッチの開閉レバーを持ったまま、啞然として飛び込んできた人物を見つめた。

テーブルの上には、彼女が叩きつけるように置いた書類の束が散乱している。

「いったい、何の話だね？松尾君」

いつもは柔和な物腰を崩さない八幡も、待望の細胞サンプルを前にして問題を持ち込まれては、不快そうな表情を隠せない。口をへの字に曲げ、眉間にもしわを寄せている。

何より、息を切らせたもう一人の女性研究助手、松尾紀久子の、あまりの剣幕に驚いていた。

「もしかして教授は……今朝、ラボに搬入された検体のことをご存じないのですか？」

呆気にとられたような八幡の様子を見て、紀久子は、自分自身も怪訝そうな表情をした。

「検体？ああ、医療研究所から運び込まれたという、脳死遺体のことかね？」

「遺体ではありません！！」

「遺体じゃない？ いったい、何を言っているんだね！？」

今度の検体は、国立病院で亡くなった、できるだけ若い成人の脳死遺体、であるはずではないのか？

八幡は、彼女の言うことがまったく理解できなかった。

これまで、八幡の細胞学研究室では、G細胞と様々な生物の万能細胞との、細胞融合による新種細胞の生成と培養を目指してきた。これが成功すれば、G細胞を使った万能細胞により自己治癒力を飛躍的に増進できると考えたのだ。

単細胞生物から、無脊椎生物、魚類、両生類、爬虫類、鳥類、ほ乳類と順を追って実験を進め、それらの分類群を代表する実験動物に対して、その融合細胞の体内への注入試験を行ってきた。

今日は、これまでの研究結果を踏まえ、いよいよ人間に対する融合細胞の注入試験を行うはずであった。

しかし、人体実験はヘルシンキ宣言で禁止されている。

死体と認められた脳死遺体ですら、実験に使用するのには倫理的な問題で困難である。臓器移植法が制定された現在であっても、状況は大きく変わってはいない。

医学的に将来大きく貢献できるはずの、G細胞研究であるからこそ、ようやく脳死遺体が細胞学研究室に回してもらえることになったのだ。

「まさか……………生きているということかね？」

「そうです。意識こそありませんが、脳死状態ではありません……………カルテでは末期の脳腫瘍患者ということですが……………お聞きになっておられないのですか？」

「当然だよ！ いったい何の手違いでそんなことになっているんだね?!」

「そうだ、伏見君はどうしたんだ？ 検体の手配を、厚生労働省に申請したのは彼だろう？」

それを聞いた紀久子は、さらに怪訝そうな表情になった。

「それが……………伏見先生は、八幡教授の指示であるから問題ないとおっしゃって……………すでに施術室へ……………」

それを聞いて八幡の顔色が変わった。

「馬鹿な！！ 初めての人体に対するG細胞試験だぞ！ 私抜きで
施術に入るわけがないだろう！？」

はじかれるように立ち上がった八幡は、そのまま部屋を出ると、
数百m離れた第2ブロックにある施術室へ向かった。

彼らのいた第三ブロックから、施術室のある第二ブロックまでの
まっすぐな廊下は、百m近くあった。途中いくつかのドアがあり、
そこには居住区への通路や、会議室などの部屋がある。

大きな窓はなく、五m置きに二十センチほどの小さな丸いのぞき
穴があるだけであった。

そののぞき穴には、分厚い超耐圧の透明プラスチックがはめ込ま
れている。

しかし、そののぞき窓の向こう側には真っ暗な深海が広がるだけ
である。深海には、太陽光が届かないのだ。この窓は明かり取りで
はなく、外部観測用のものなのだ。

八幡の後について、紀久子と並んで歩きながらいずもが言う。

「教授がご存じないとすると……まさか、伏見先生が独断で人体実
験の手はずを整えたっていう事でしょうか？」

「そうとしか考えられないな。」

だが、彼はスタンドプレイに走るような人間ではないし……そも
そも、いくつもある入所チェックを彼の独断でクリアすることは不
可能だ。

それに……こんな事をして、いったい彼に何のメリットがあるん
だ？」

八幡の疑問ももつともである。あわてて追いかけてきたウィリアム教授も首をかしげた。

「うむ、しかし八幡君、これは大問題だぞ。

国連直轄のこの施設で人体実験が行われたとなると、最悪、ラボ全体の閉鎖にも発展しかねん。」

話すうちに、四人は施術室の前に着いた。

「伏見君！！ここを開けたまえ！いったいどういつつもりなんだ！！」

開閉ボタンを押して開けようとしたが、スライド式のドアは内側からロックされているようで、まったく開かない。

八幡はドアを強くたたいた。すると、インターフォンより伏見の声が聞こえてきた。

「……………すみません。八幡先生。こんな……………先生をだますようなことはしたくなかったです。」

「伏見君！もし、このような人体実験を行ったことが、外部に知れたら、わたしや君の研究者生命の問題だけでは済まない！！」

結果次第ではこの研究自体を止められて、二度と誰も、G細胞を研究できなくなるかも知れないんだぞ！！」

「分かっています……………分かっているんです……………でも……………でも……………申し訳ありません。」

伏見の声は、悲痛な響きを帯びていた。

「伏見先生！？ いったい、どうしてこんな事をしなくてはならないんですか？」

「せめて……せめて、理由をおっしゃってください！！！」

必死で叫ぶ紀久子の肩を、ウィリアム教授がたたき、押しとどめた。

「……もういい。私には理由が読めた。松尾君……検体は脳腫瘍末期の若い男性患者、そう言ったね？」

「はい。十八歳の……少年です。」

「……伏見君……もしかするとその患者は、君の息子さん……じゃないかね？」

その言葉を聞いて、ウィリアム教授以外の全員がはっと息をのむ。

「……………はい。」

長い沈黙の後、伏見の声がインターフォンから小さく聞こえた。

これまでのG細胞による動物実験、その結果は素晴らしい……いや、すさまじいと言っても良いものだった。

21世紀初頭から、G細胞は各国で研究されていた。

当初は、破壊の権化たる巨獣Gの脅威に対抗するため、生態研究が主に行われたが、Gの細胞の特性が明らかになるにつれて、特に医療分野で大きな期待が注がれはじめた。

再生医療、遺伝子治療といった分野では、21世紀に入ってから

革新的な技術が多く発表されていたが、それぞれの技術を臨床段階にまで進めるには、いくつかの壁があった。

それを一気に解消する一つの光が、G細胞の研究だったのだ。

「巨獣G」は三畳紀の恐竜類、もしくは獣型爬虫類の生き残りと思われていたが、近縁種と思われる生物の化石はひとつも発掘されていない。

それは形態、生態、ともに系統的に類似した生物がないということでもある。

北米で発見されたゴジラサウルス・クエイイと呼ばれる肉食恐竜の化石は、形態こそ近いのだが、基本骨格の相違などから近縁種とは見なされていない。

また、G細胞の培養結果から細胞そのものは細胞分裂の回数に限がなくアポトーシスが起きない。つまり、基本的に老化しない事が分かってきたのだ。

多細胞生物の細胞死、アポトーシスは、個体をより良い状態に保つために積極的に引き起こされるものである。管理・調節された細胞の自殺……すなわちプログラムされた、細胞の寿命のことだ。

ところが、G細胞の場合、アポトーシスを起こす前段階としての細胞膜の構造変化の後、細胞核が凝縮せずに、万能性を回復して細胞自体が組織から分離してしまう。体液の流れに乗った細胞は、次々とその役割を変えつつ、全身を移動して様々な器官に変化する。

ということは生きている間中、細胞分裂した分だけ、確実に細胞数が増えていくわけだ。

こうして、積み重ねられた細胞分裂の結果として巨獣化が起こる。細胞が死なないでいつまでも残り続けるのだから、当然の帰結だ。

また、以上のことから、Gは個体としても不老不死であるといえる。

近縁種が見つからないのは、ただ一個体で悠久の時を生き続けてきたためなのかも知れなかった。

この、どの器官にもなれる万能性を持ち、増殖性を持つという特徴を持つG細胞は、IPS細胞やES細胞といった万能細胞とよく似た性質を持ちながら、何故かガン化することがない。

単にガン化しないというだけではない。動物実験の結果では、発病していたガン細胞の消滅までもが確認されたのだ。

しかも、感染症などへの免疫強化、欠損部位の自然修復、運動能力の飛躍的向上など、あらゆる対象生物で劇的な効果が見られたのだ。

つまりは、ついに不老不死の妙薬の糸口が見つかったようなものだった。

巨獣化という問題さえクリアできれば、人類は死を超越し、新しい段階に進むことが出来ると考える者さえあった。

人類は驚喜した。

研究材料となったG細胞は、Gとの戦闘時に剥がれ落ちた表皮や肉片から培養され、全世界の研究機関に分配されていった。

しかし、医学的平和利用という建前であったため、その危険性の面は楽観視され、ほとんど、何の規制もかけられなかったのである。

そして結果的には、それが大きな過ちであった。

研究過程において、様々な方法でG細胞の特性を組み込まれた生物の多くが巨獣化し、予想を超える能力を身につけて研究施設から脱走した。

中には研究施設そのものを破壊してしまった例まであった。

実験対象の生物だけでなく、一部の国のルーズな実験環境においては、研究施設周辺の野生生物までが、G細胞を体内に取り込み、巨獣化したと思われる事例まで起きた。

世界中の複数箇所では巨獣と化した様々な生物達が、なぜかほぼ同

時期に暴れだし、それに呼応したかのように、巨獣の本体とも言えるGが目覚め、日本に上陸……。

人類の経験するバイオハザードとしては、最悪の被害を引き起こした事件となった。当時の最新兵器を使つての総力戦によって、ほとんどの巨獣が殺処分された。

しかし、その時には世界中で十一の都市や町が壊滅し、二十万人を超える人々が亡くなった。北米の小さな集落では、建物ごとすべての住民が一夜にして消えた例もある。

被害はあまりにも甚大であつた。

それが十五年前に起こつた、「巨獣大戦」と呼ばれる出来事である。

皮肉なことに、この時生まれた協力関係によって世界はこの十数年、過去に例を見ないほどの平和と安定を手に入れていた。

では、この巨獣大戦の引き金をひく結果となつた、G細胞の医学応用研究はどうなつたのであろうか？

人類は、大きな反省を持つてGに向かい合うこととし、もっとも被害の大きかつた日本の首都、東京で国際会議が開かれた。その中でGの研究、対策に関する国際間条約「Gの生態および生物学的研究に関する国家間条約」通称「東京G条約」が締結され、ほとんどの国がこれに加盟した。

この条約により、G研究に関して厳しすぎるほどの条件が設定されたため、一時的に全世界で研究はほぼ完全に中断されたのだ。

しかし人類の夢、ガンの克服と不老不死が目の前にぶら下がっているのだ。

危険があろうとも、G細胞をなんとか研究すべしという議論は常に戦わされてきた。そして条約締結から約五年後、つまり今から十年前のこと、Gの遺体発見を契機に条約の厳しい条件をクリアできる研究施設が、国連とWHO主導の元で建設されることとなつた。

G細胞の研究はきわめて限定的に、また隔離された空間でのみ、

行われなければならない。そこで、研究施設は二カ所、宇宙空間と深海に作られることになったのだ。

そしてGの遺体が発見された日本近海の海底に建設された施設。それが八幡達のいる海底ラボ「シートピアアカデミー」なのであった。

「この海底ラボに、書類を改ざんしてまで連れてきたのは、息子さんの命を救うためだったんだね？」

八幡が、マイク越しに話しかけた。

「……………そうです。息子の命は、もうあと何日ももたない状態です。なんとかG細胞の医学応用技術が確立するまで、待ちたかったのですが……………ですから私も、ここしばらくは病院で息子に付き添っていました。」

そこへ先日、私のいない間に八幡先生が、tRNAを用いた、画期的な細胞質誘導での動物実験を成功させたと……………」

伏見の言葉を聞いたとたん、八幡の顔色が変わった。

「待ってくれ！ 伏見君！ いったい、誰がそんな事を言ったんだね?!」

「そうですね!! たしかに細胞質誘導で、死亡率だけはゼロになる目処は立ちましたけれど、先行実験に使用されたニホンザルは……………!!」

紀久子も驚いて叫ぶ。

「……………どうなっただって言うんですか!？」

インターフォン越しに問いかける伏見の声は、明らかに動揺していた。

「処置後一週間で……通常個体の……二倍の体重に……」

紀久子の言葉は、死刑宣告のように静かな廊下に響き渡った。

「そんな……では、あのメールはいつたい……」

マイク越しにも、伏見が息を呑むのが伝わってきた。

そのとき、廊下の曲がり角の向こうから、低い笑い声がひびいてきた。

「くつくつく……ばれるのが、予定より少しばかり早かったな。しかし伏見君、息子への処置はもう終了したのだろうか？」

姿を現したのは、電動車いすに乗った、白髪の老人であった。

「あなたは……シュライン博士！」

マーク シュライン、米国籍。

すでに80歳に近い年齢と言われている、分子生物学の権威だ。しかし、高齢の上にかかなりの肥満体であり、小さな車いすから肉がはみ出している。

その足の障害も、あまりの肥満のため、膝が悪くなったためではないかと噂されているくらいだ。

巨獣の、画期的な分子生物学の研究論文を認められて、この海底ラボに招聘されている世界トップクラスの研究者の一人である。

「なるほど、あなたの手引きか。それで納得がいきましたよ。伏見君一人で、このラボに重病人を運び込むなんてことが、できるはずがない。」

八幡は、厳しい目つきでシュラインをにらんだ。

米軍の佐官資格を持っているシュライン教授ならば、米軍基地の治外法権を利用して、ほとんどノーチェックで物資を海底ラボに入れることが出来る。おそらく、その特権を利用して、病人を運び込んだのだ。

しかしシュラインは悪びれる様子もなく、涼しい顔で八幡の目を見つめ返している。

「どうしても、生きた人間細胞との融合を果たしたG細胞サンプルが欲しくてね。」

シュラインは残酷な言葉を平然と言ったのけた。

「な……………んだと……………!!」

冷淡な口調に、八幡が気色ばむ。

「ここを開けてください!! 伏見先生!! 今からでも、何か処置が可能かも知れませんか!!」

にらみ合う二人のそばで、いずもが、必死で叫んだ。

施術室のドアが、音もなく開き、真っ青な顔の伏見が現れた。

八幡はすぐに室内に駆け込むと、いくつかの装置の記録をチェックし始める。

「松尾君……………」

伏見と、紀久子の目があった。

「なんとか、息子を救いたかった……」

「もう、何もおっしゃらないでください……」

「いや、息子は処置をしてから時間が経っていない。もしかすると……ある程度の処置が可能かも知れない……」

「そうですね。抗ウイルス薬を点滴すれば、ベクターを殺せます。うまくすれば、巨獣化を防いで、G細胞の医学的効果だけを得られるかも……」

「そう、あつて欲しい。しかし……私はもう……手遅れだ。」

「……………今？　なんて……」

紀久子が目を大きく見開いて、伏見を見つめる。

「自分の息子に、いきなりこんな前例もない処置が出来るものか。私自身を実験台にして、昨夜、処置の安全性を確認したんだ。」

それを聞いた紀久子は息をのんだ。

「そんな……じゃあ、伏見先生はどうなるんです!？」

いずれもの甲高い声が廊下に響いた。

いまだ、実際に人間にG細胞を組み込んだ実験例はない。つまり、どのような影響が現れるかは未知数なのだ。しかし、伏見が自身の体にG細胞を組み込んでしまったのが昨夜ならば、最低でも十数時間は経過している。となれば、すでになんらかの変化か、その兆候があっても不思議ではない。

伏見は、施術室の隣にある、休憩室に隔離されることとなった。

伏見の息子、伏見 明^{あきら}は、意識を失ったまま、施術室で抗ウイルス薬・アシクロビルの投与を受けている。

G細胞から抽出した遺伝子のベクターである、ヘルペスウイルスを殺すためだ。

だが、幸か不幸かG遺伝子の効果はすでに表れていて、死の寸前にあったとは思えないほど、明の容態は安定してきていた。

「明君の被験データは、私の研究室で収集しよう。」

こんな人体実験のようなことは、私としても本意ではあるが、貴重なデータとなるだろう。もちろん、彼の治療も責任をもってやらせてもらう」

机の向かい側に座る、憔悴しきつた様子の伏見に、八幡は話しかけた。

「……すみません」

「シユラインは、米軍に引き渡すために拘束した。といつても、足の悪い老人に何が出来るとも思えないがね」

「なんですって!?! いけません。」

シユライン博士は、恐ろしい人です。ぜひ、密閉度の高い実験生
物用の隔離室を使うようにしてください」

「伏見君?何を言っているんだ」

「イヤな感じがするんです。」

私もすでにG遺伝子の影響を受け始めているせいかもしれませんが……
感覚が異常に研ぎ澄まされていくのがわかる。

その感覚が、ヤツは危険だと言っているんです」

それを聞いて、八幡は強ばっていた表情をゆるめて微笑んだ。

「なんだ馬鹿馬鹿しい。それじゃ、単なる君の勘づいてことだろう。
今回の、彼の一連の行動理由も目的もハッキリしている。自分の
寿命が近いので、焦ったんだ。違法は承知で君をだまし、臨床実験
をやらせたかったんだろう」

シユラインはずっと黙秘を通していて、自白は得られていないが、
研究所の事務局ではすでに、そう結論づけていた。

「待つてください! そんな安易な話では……」

「まあ、君たち親子には申し訳ないが、症状が安定するまではここ
にいてもらうよ。」

なに、ニホンザルの被験体も、急激な大型化以外に、大きな形態
変化は見られないし、その大型化だって今は落ち着いているらしい。
一時的な巨大化は、個体の成長期であったことが主な理由だろう。
現に君も息子さんも、外見上、なんの変化も見られない」

八幡は、伏見の言葉を遮るように言った。

「いえ、外見や生理状態ではなく、筋肉や組織、器官をチェックしてみてください。自覚症状が出てからでは……」

「血液や尿の検査はすでに終わった。血圧、心拍、脳波、いずれも不思議なくらい異常がない。これは、喜ぶべき事だと思うがね？」

八幡は伏見の目をのぞき込んだ。

「不安な気持ちは分かるが、考えすぎないことだ。厳しい言い方をさせてもらえば、君が自分で蒔いた種だろう？」

「……………」

それを言われてしまうと、伏見には返す言葉はなかった。その時、一瞬しんとした部屋にインターフォンが鳴った。

「八幡先生、伏見先生、明君が目を覚ましました」

流れてきたのは、いずもの声だった。

§3 伏見 明

§3 伏見 明

「ふっつ……」

伏見 明は、深いため息をつくともベッドに横になった。

さつきまで、父を含めた数人の研究者から、様々な注意事項について説明を受けていたのだ。

死の淵から意識を取り戻した明が聞かされたのは信じがたい話ばかりであり、それらを自分の身に起こった現実として受け止めるには、かなり時間がかかりそうだった。

『君も、お父さんの伏見先生も、巨獣化してしまう可能性は捨てきれない』

最後に八幡教授はそう言った。

明はベッドの中でブルブルと体を震わせた。そうやってしまった場合に、はたして人間はどのような形態になるのか、どこまで大きくなるのか、そして、心は人間のままでいられるのか……すべてがファーストケースであり、何一つ分かってはいないのだ。

せめてもの救いは、自分たち親子のいるこの研究所、シートピアアカデミーがG細胞研究の最前線であり、あらゆる事態に対応できる技術と設備があるということであった。

(とはいえ……思い悩んでみても、仕方ないよな……)

不安でないと言えば嘘になる。だが、思えばつい数日前までは、

自分は死の床にあったのだ。危険な方法を自分に施してしまったことを、父は何度も自分に謝っていたが、明の心には父を責める気持ち少しもなかった。

朦朧としていたため、ハッキリとは覚えていないが、一度は完全に死の淵まで行ったのだろう。栄養点滴ではなく、もう一度まともな食べ物をお口にしてい、苦痛を気にせず楽に眠れる。それだけのことで、明にはありがたかった。

「それどころか、あんな可愛い女性と知り合えたんだから……名前とか聞けばよかったなあ………そういえば、年はいくつなんだろう……ま、年上なんだろうな………」

口元を弛めながら、思わずひとりごとをお口にしました。

カルテでは十八歳になっていたが、入院中に誕生日を迎えたため、明は今、十九歳だ。

最近では、ネットで検索すれば大抵の情報は手に入る。だから、自分の病気のことはよく知っていた。

先の見えない長い闘病生活の間、看護師さんやお見舞いに来てくれる高校の同級生など、同じ年映えの異性がいなかったわけではない。が、とてもではないが、その頃は、そんな気持ちにはなれなかった。

昨年の春、某国立大学の理学部を受験し、合格はしたものの、入学直前に激しい頭痛に襲われて入院したため学校には行っていなかった。休学扱いにはしてもらったが、大学に通う日は来ないものとして理解していた。

入院生活は、毎日、殺風景な病室と検査室、処置室の往復だけであつた。

放射線治療はまだしも、抗ガン剤の副作用はつらかった。だが自分の命のことよりも、三年前に母を失い、今、一人息子の自分がい

なくなることで、一人ぼっちになる父のことが心配だった。

半年前、病状の悪化した自分を置いて、父が海底のG細胞研究所に行くと言い出したのは、自分の病気を治す方法を探すためではないかと、薄々感じてはいたのだ。

（それにしても、まさか親子してこんな事になっちゃうとはなあ…）

明は、またため息をつき、今度は本格的に眠る体勢になった。

翌朝……といっても、深海のことであるから、日差しが差し込んできたわけではない。顔に当たる人工照明と、カチャカチャという金属がふれ合うような音で、目が覚めたのだ。

照明はタイマーで点くのか、入ってきた白衣の女性が点けたのかは分からない。必要以上に明るい気がして、明は呻いた。

「えらく……眩しいですね……こんなに電気のムダ遣いをしていいんですか？」

「あ、目が覚めたんですか？」

「ええ……」

昨日の女性、松尾紀久子である。落ち着いた、しかし少女のように澄んだ高いトーンの声に、知らずに鼓動が早くなるのを感じなが

ら明は答えた。

「この研究所、電気だけは有り余っているんです。海底と海面の温度差を利用しての発電で、充分すぎるほど賄えちゃうんですよ」

「へえ、そうなんですか」

「光量が強いのは、何ヶ月も海の底にいたステンレスのワゴンの上に、医療器具を並べていく。入院期間の長い明にとっては、見慣れたものばかりだ。」

話しながら、ベッド脇に置いたステンレスのワゴンの上に、医療器具を並べていく。入院期間の長い明にとっては、見慣れたものばかりだ。

「採血するから、じっとしててね？」

紀久子は明の腕にゴムのバンドを手際よく巻いた。いつのまにか、口調がぎつくばらんなものになっている。

明は、親指を握り込んで手に力を込めた。こうすると、血管が浮いて探りやすいのだ。

「あ、ありがとう。そうか、明君、入院してたんだもんね」

「ええ、ほぼ、毎週採血でしたから……」

「そ、そうだね。大変だったね……」

言っではいけないことを言ったと思ったのか、紀久子は耳まで真っ赤にして黙り込んだ。

「あ！ そうだー！」

急に大きな声を出した紀久子は、息がかかるほど顔を近づけて、明の目をのぞき込んだ。

「は……はい？」

「あのね。ひとつ忠告。

ひとりごとは聞かれちゃうから、やめた方がいいよ？」

どきまぎしている明に、小声でそう言うと、紀久子はいたずらっぽく笑った。

「え………！？」

数秒間考え込んだ明は、紀久子の言葉の意味を理解して顔から血の気が引いた。

この部屋はモニターされていたのだ。

教えられてはいなかったが、たしかに常識的に考えれば当然の措置だろう。G細胞の影響下にある今の明は、急に状態が変化する可能性も充分あるのだ。

明は自分のうかつさに呆れた。しかも、ひとりごとというところではない。

『それどころか、あんな可愛い女性と知り合えたんだから……名前とか聞けばよかったなあ………そういえば、年はいくつなんだろう……ま、年上なんだろうな……』

にやつきながら口にした自分の言葉の一言一句が、脳内を反響して、文字通り顔から火が出るかと思うほどだった。

「そりゃあ、彼女が可愛いのは誰だって認めるけど、いきなりだとビックリしちゃうよ。でも、大丈夫。あれ、聞いてたのって、当直だった私だけなんだから」

さらに声を潜めて、ひそひそと話す紀久子の目を見つめながら、明は面食らって声も出せないでいた。明が『可愛い』と言ったのは紀久子のことなのだが、当の本人は微塵も気づいていない様子だ。それにしても、『彼女』とは、誰のことを言っているのだろうか？

（ああ、そういえば、昨日のメンバーの中にもう一人、女性がいたっけ？）

明は、白衣の群れの中にもう一人だけ女性がいたことを思い出した。

「彼女、ホントきれいだよねー。私の大学の後輩なんだけど、優しいし、マジメだし、性格も明るくていい子だよ」

そう言われても、明はその女性の顔すら思い出せないでいた。昨日は主に八幡教授から説明を受けたのだが、八幡教授の表情を見る以外は、ほとんど、紀久子のことしか見ていなかったのだから無理もない。

「あ、ああ……そう、ですよね……」

明は、我ながら妙な返答になってしまったと思ったが、それを紀久子は凶星を指されてうるたえたものと判断したらしく、声を潜めたままくすぐすと笑った。

「だから、そんなに心配しなくても大丈夫だよって。

人間は体の健康だけじゃなく精神衛生だって大事なんだから、こんな所に閉じこめられていたって、恋ぐらいしなきゃね。

ライバルは多いけど………私も応援してあげるよ………」

そのとき、紀久子の表情に、かすかな翳りを見つけて、明はとまどった。

しかし、その表情は一瞬だけで、すぐに屈託のない笑顔に戻った。紀久子は言った。

「彼女ね。雨野いずもさんっていうの。年は23歳。落ち着いて見えるけど若いでしょ？でも4つ年上っていうと、ちょっと離れすぎかな？それでね………」

その時、天井からブザー音が鳴った。

「松尾君、そろそろ戻ってきてもらえないか？朝のミーティングの時間だ」

紀久子があたふたと出て行った後、明はベッドに沈み込んだ。

（思いつ切り勘違いしてたな、あの人……）

しかし、勘違いしていて助かったような気もするし、自分をまったく意識していない証拠とも言えるので、残念な気もする。

（まあ、これから親しくなればいいんだし……な）

明は、とりあえず、良い方向に考える事にした。しかし彼女について分かったことは、名字が松尾さんで、年齢は少なくとも23歳

より上、ということだけだった。

それにしても、自分の体がどう変化するのか分からない状況のくせに、その事より、女性に考えが行ってしまう自分自身にも、明は驚いていた。

自分の身に起きていることが現実離れしすぎていて、いまいち実感を伴っていないこともあったが、目覚めてからずっと、自分の体に対して根拠不明の安心感というか、自信に近いものを感じていたのだ。

（たぶん、オレも父さんも大丈夫だ。

母さんを失い、闘病生活でもあれだけ苦しい思いをしてきたんだ。これ以上辛いことなんて、あつてたまるか）

だが、明は自分の思考が、いまだかつて経験したことがないほどクリアになっていることに、気づいてはいなかった。そして、それこそがG細胞の影響だということにも。

その日は、いくつかの簡単な検査をされた。検査といっても、重病人だった頃に比べれば、どうという事もない検査ばかりだ。

しかし、明の気にしている松尾さんこと紀久子は、結局、朝以来、顔を見せなかった。

（オレに余計なことと言って、怒られてるんじゃないだろうな？）

明は少し心配した。特に秘密にする必要はなかったはず……とはいえ、明の自然な様子を観察するには、監視していることは教えない方が良かったに決まっている。

「あ……えーと、雨野……さん？」

明は思いきって、夕食を持ってきてくれた白衣の女性に声をかけた。

「あれ？ 私、名前教えたっけ？」

いずもは、面食らったように明を見つめ返した。

たしかに、紀久子が言ったとおり、相当な美人だ。年齢より大人っぽく、細面の整った顔立ちをしている。ウエーブのかかった栗色の長い髪と屈託のない笑顔は、かなり魅力的に見えた。いや、ちょっとしたタレントよりも、ずっと綺麗かも知れないと明は思った。

「あ、その、松尾さん……から聞いたんです」

「ああ、おキクさんから？」

「ええ。そのホラ、僕と父の関係者の方のお名前を、一応聞いておきたくて」

明は思わず嘘をついた。松尾さんから、すべての人について情報を聞いたわけではない。

「あの、それでお話の途中に、松尾さん、呼び出されて行っちゃったんで、他の人の名前とか、お聞きしておきたいなーって……」

「なあんだ。そうだったの？」

そういえば、八幡先生つたら状況の説明ばっかで、自己紹介も無しってというのは、たしかに変だったわね」

いずれもは、部屋に出入りする可能性のある、関係者の名前を次々に教えてくれた。

細胞学研究室長の八幡 啓介 教授。

生化学研究室からサポートに来ている白山 仁 助手。

大脳生理学研究室からは、東宮 照晃 助手。

防衛大学のG細胞研究室から、干田 茂朗 准教授。

WHO世界保険機構のG研究専従班、石瀬 北斗 研究員。

「あと、細胞学研究室の准教授はあなたのお父さん、伏見 稻成先生。同じく助手は、私……と、おキクさんのことは知っているのよね?」

明はあわてた。それを聞くのが本来の目的なのだから。

「あ、いえ、その、あの人、自己紹介しないで行っちゃったんで……下の名前、キクさんっていうんですか?」

「紀久子よ。松尾紀久子。世紀の紀に久しいっていう字」

思っていたより古くさい名前に感じたが、彼女の清楚な見た目によく似合う名だ。明は、心の中で喝采を叫びながら、さらに聞いた。

「へ……へえ、あの、そういえば雨野さんの先輩だって仰っていましたが……」

「そうよ。同じ学部の一コ上の先輩。

サークルもオーケストラで、同じだったんだよ。おキクさんはバイオリン、私はフルート……」

「へえ、クラシック音楽ですか、なんだか、お二人のイメージにぴったりですね」

明は、素直に思ったことを言った。

「う…うん。そうかな？…そうそう、いつけない。研究室に戻らなきゃ」

いずもは、時計を見ると何故かそそくさと席を立ち、部屋を出て行ってしまった。

明は、また急に一人ぼっちにされて、あっけにとられていた。

(今の会話で、何かいけないこと、オレ言ったかな?)

一見仲が良さそうな女性研究員二人の間にも、何か隠し事がありそうな気がした。

§ 4 巨獣化の原理

§ 4 巨獣化の原理

「ふう、明君に変に思われちゃったかな……」

いずれもは廊下に出ると、ドアの横の壁にひたいを押しつけ、ため息をついた。

「なんか……まだ、学生時代のこと、普通には話せないな。それに、東宮先輩まで同じ研究所にいるなんて思わなかったし……」

「ほほう。それは助手の東宮君のことかね？」

急に声をかけられて、いずれもは飛び上がるほど驚いた。

しかし、さらに驚いたことに、いずれもは背後から声をかけてきたのは、今まで見たことのない、金髪の少年だったのだ。真っ白な肌と蒼く澄んだ瞳から見ても、欧米人に間違いない。天使のようなあどけない表情で微笑む少年の額には、柔らかそうな巻き毛がふわっとかかっている。年齢は10代前半くらいだろうか。

「あ……あなたいったい、誰？」

そう問いかけたいずれもの足に、激痛が走った。

「い……痛……！」

あわてて振り向くと、なんと、右のふくらはぎに大きな白いネズミが噛みついていて、見る見るうちに血が白いソックスにしみてい

く。傷はかなり深いようだ。

「いやっ!!! 何これ!?!」

いずもが叫んで手でネズミを振り払おうとした時には、すでにネズミは消え、残された傷口からは血が溢れていた。いずもはバランスを崩し、その場に尻餅をついて座り込んでしまった。

「ふむ。まだだと言ったのに……距離が少しでもあると言っことを聞かなくて困るな。」

見上げると少なくとも3m以上離れたところにいたと思っていた少年が、すぐ目の前に立っていた。少年の声のままだが、その口調はまるで老人のようだ。

よく見るとその腕には、たった今いずもを噛んだに違いない白ネズミを抱いており、ネズミの口はいずもの血で真っ赤に染まっていた。

「!?!」

あまりの奇怪さと恐怖に、いずもは気を失った。

「雨野君、雨野君!!! いずも!!!」

揺り起こされたとき、いずもはまだ、明の部屋の前の廊下だった。どれだけ気を失っていたのか。

「こんな所で、いったいどうしたんだ?」

いずもを介抱してくれたのは、どうやら大脳生理学の東宮助手の

ようだった。

「あ……東宮先輩？」

「ふう、やっと気がついたか」

東宮は、いずもが目覚めると、ほっとしたような表情になった。

「まったく、何をやってんだ？ まさか、徹夜で論文読んでたってワケでもないんだろ？ 体調が悪いのなら、休息を取るべきだろう。昔っから君は……」

よほど心配したのかも知れないが、東宮はいずものしゃべる隙もないほど、次々とまくしたてた。たしかに介抱してくれたことには、感謝すべきだが、東宮の無神経な物言いは、いずもにとっては、あまりにもカンに障った。

「手を放してください。」

いずもは横たわったまま、下からものすごい目で睨みつけると、東宮の腕を振り払って立ち上がった。

「お、おい、大丈夫なの……か？」

睨みつけられた東宮は、今度は一転しておどおどした態度を取っている。

（そういえばこういうヤツだったわね。別れて正解）

東宮は、いずもにとっても、紀久子にとっても、同じ大学のサー

クルの先輩だった。大学一年の春、右も左も分からなかったいずもに話しかけ、何かとかこつけては買物の手伝いや、サークルの時の送り迎えなど、こまめに世話をしてくれたのだ。

男性に免疫が無く、東宮をただ親切なだけの先輩だと本気で思っていたいずもは、つきあってくれと言われた時には、下心があったのかと驚き、少々呆れもした。が、その熱心さにほだされ、結局はその申し出を受けることにしたのだった。

しかし、東宮の、気弱なくせに内弁慶で、調子に乗るとどこまでもつけあがるという、なんとも鼻につく性格にうんざりし、ほんの数ヶ月で別れたのだ。

自分とつきあう前、東宮が紀久子ともつきあっていたと聞いたのは、別れてから、ずいぶん経つてのことだった。紀久子は、これまでと同じように接してくれていたが、東宮のことを含め、学生時代のことはどうしても話しくかったのだ。

「介抱してくださってありがとうございます。でも、氣遣うなら、けが人を説教する前に、することがあるでしょう?」

そう言いながら、ネズミに噛まれた足をさすった。

(あれ?)

傷が、ない。

いずもはあわてた。あれほどの深い噛み傷だったのだ。氣を失っているうちに、治るとかいうレベルの傷ではなかったはずだ。

しかし、ふくらはぎには傷跡どころか、まったくそれらしい跡すらない。それどころか、ソックスにしみたはずの血の痕まで消えていた。

「夢……だったのかな?」

ぼうつとしているところへ、東宮が声をかけてきた。

「いずも…いや雨野…君？ どこか…怪我したのか？」

だが、いずもは曖昧に返事を返すと、呆然と佇む東宮を残し、そのまま自分の研究室へ帰っていった。

「ほう…君も被害にあったのかね？」

ふらふらと研究室へ戻ったいずもに、八幡は意外にも真剣な顔で言った。

「え？君も…つて？」

まともに聞けば、誰もが笑い出してしまういずもは、驚いて逆に聞き返した。

研究室内には、データ報告のために来ていたのか、生化学研究室助手の白山 仁、防衛大学の準教授、干田 茂朗、WHOの石瀬北斗 研究員の3人もいて、目を丸くして二人のやりとりを聞いていた。

「いや、ここしばらくの間に、ネズミや犬猫を所内で見たという話が急に増えているね。実験用の動物が逃亡したのではないかと騒がれていたんだ」

「え？でも、そんな話は聞いたことがないですよ？」

石瀬が怪訝そうな顔で聞き返す。

「いや、実際に実験動物が逃げたりしていたら大問題なんだが……飼育室を確認しても、逃げた動物は一頭もないんだ。しかも、雨野君のように噛まれたと主張する者も多いんだが、誰にもその傷跡が残っていない。だから、教授会だけの話題にしていたのさ」

「なるほど、そうだったんですか……」

「だが、その金髪の少年についての報告は初めてだな。どんな少年だったんだね？」

八幡は、いずもの方へ向き直って聞いた。

「はい、幽霊だとしても……なんだか、すごく素早くて……キレイな幽霊でした」

「……のんきなものだな。やはり夢でも見たんじゃないのか？」

いずもが、少し遠い目をして言うのを見て、苦笑いしながら干田が言った

「素早くてキレイな幽霊、か。ははは。」

私は密閉空間のストレスによる集団ヒステリーじゃないかと推測していたんだが……これだけの人間が別の条件で、同じ現象を目撃したとなると、もしかすると何かあるのかも知れないな」

八幡が話にケリをつけようとした時、紀久子が研究室へ帰ってきた。

「あ、おキクさん」

「あれ？　いずもちゃん。どうしたの？」

「んーと……なんか、ヘンな体験しちゃいました」

いずもは、また始めから自分の経験した奇妙な事件について話さなくてはならなかった。しかし、東宮に助けられたという部分だけは、曖昧にぼかしておいた。

「その件については、また教授会で報告しておこう。それより、今日の伏見君たちの様子はどうだったね？それと、先行実験したM-09もだ」

放っておくと、いつまでも幽霊話を続けそうだと思ったのが、八幡は、紀久子達に計測データの提出を促した。

「伏見先生にも明君にも、身体計測の結果には、大きなサイズ変化は出ていません。今のところは、巨獣化は抑えられていると思われます」

「では、M-09の方はどうだね？」

「M-09、サンの場合はここ数日でも、少しずつですがサイズアップしています。生後約3ヶ月で、今の体重は20kg。標準的なニホンザルの成体で、10kg前後ですから……」

「ふむ。やはり完全に巨獣化が始まってしまっているな」

八幡は、データ数列の並んだA4用紙を見つめながら、誰へともなくつぶやいた。

「やはり、あの方法を試してみるしかないか……」

「あの方法ってなんですか？」

紀久子が、八幡の小さなつぶやきを耳ざとく聞きつけて聞いた。

「ん……ああ……いや」

誤魔化そうとする八幡に、いずもも食い下がる

「なにか、可能性のある治療法があるのですか？ それなら、ぜひ試してください。このまま巨獣化したら、サンもカイと同じように処分しなくてはなりません」

実験動物の飼育管理も担当している紀久子は、やむを得ない場合を除いて、出来る限り死なせないようにと、常に考えていた。

またサンは、そんな紀久子に、特に懐いてもいたのだ。

「松尾君、実験動物に感情移入するのもいいが、自分がつらいだけだぞ？」

カイのことだってそうだ。もともと、君達の元に来る前に巨獣化因子を植え付けられていたんだらう？」

紀久子のあからさまな態度を見て、石瀬が見かねたように口を挟んだ。

カイとはM-10のコード？で呼ばれるニホンザルの実験個体だ。しかし、秘かに巨獣細胞を手に入れていた民間の研究施設で、非合法な実験を施され、巨獣遺伝子を組み込まれてしまったため、この研究所へ移送されてきたのだ。

そして巨獣化の進んだカイは、様々な実験に供された後、手に負えなくなる前に処分されることになったのだ。

「実験動物はペットではないんだ。実験用として飼育しておきながら生存を願う、などというのは、しょせん人間のエゴでしかない……」

干田にも少し厳しい口調で言われ、紀久子は黙った。しかし、不満そうな表情は、まるで、言われずともそんなことは分かっている、と言っているようだった。

数十秒、その場を沈黙が支配した。

「巨獣化の原理……を考えたことがあるかね？」

ややあつて、沈黙を解消するかのようになり、八幡が全員に向かって言った。

「さあ、それは…… G や他の巨獣の DNA 配列を組み込まれることで、彼らと同様に細胞そのものが不死化、もしくは長寿命化して巨獣化するっていうことではないのですか？」

少し唐突な質問に、いずもがきよとんとした表情で答える。

「それは違うのではないかと……と、私は考えている」

「どういうことですか？」

「正確には、それだけではない、ということになるんだが……考え方もみたまえ、G は一説には、数万年も生き続けている可能性があるという。」

まあ、それはないにせよ、あの大きさだ。少なくとも数百年は生きていても不思議ではないだろう。だが、本当にG細胞がシャーレ上での実験通り不死であり、体細胞が残り続けていくなら、Gの巨大化がこの程度で済むと思うかね？」

「そ、それは……」

紀久子は少し苦笑いをした。八幡の言うことは、根拠不明の計算をしると言っているようなものであり、なんともコメントのしようがない。

「いや、いいんだ。Gの年齢が特定されたことはないし、もしかすると長期にわたって休眠状態にあったのかも知れない。だから、単純にGの巨大化のペースを推定すら出来ないのも事実だしね」

八幡は、見るともなしに部屋の隅ののぞき窓……Gの方を見ながら話し続けた。

「だが少なくとも、20年前の巨獣大戦の際には、急速に巨獣化した生物のうち大半が、一定の段階を経た後、自己崩壊を起こしている。誕生して数年も経たないのに……だ。しかし、Gは少なくとも、巨大化したままで、その時まで生き続けてきた……」

たしかに、巨獣の自己崩壊という現象が、人類が巨獣達を駆逐できた大きな要因の一つであった。

「たしかにそうです。でも……」

不満そうに干田が立ち上がる。巨獣大戦時の記録データについてなら、防衛大学で学んできた彼は黙ってはいられないのだ。

「自己崩壊を起こした巨獣ばかりではありません。中には、G並みの巨大化を果たし、素体となった生物からは考えられない環境適応を果たした個体も多数あつたはずです」

「まあ、待ちたまえ干田君……君達は、よく巷で論争されている、理論的にGは生存不可能、という説を知っているかね？」

八幡は、またしても妙な話を持ち出してきた。

「ああ、科学者ぶつたオタクのいい加減な計算式で、あの体重と体積では、歩くことも出来ないはずだとか、生まれた直後に自己崩壊するとかって珍説ですね？」

「そうだ」

「何を言ってみたって、実際にGが存在している以上、始まらないんじゃないですか？」

むっとした表情のまま干田が答えた。

「いや、あの計算式の根拠となつたGの体重なんてのは、たしかにいい加減だが、身長100m近い巨体が保持できるだけの強度の骨や筋肉、ミサイルも硬質ドリルも通らない皮膚なんていうのは、普通の生物の常識ではあり得ない、というのも確かだろう」

「でも、それだからどうだと言われるのですか？ それも現に存在しているからには……」

いずもが八幡の言わんとするところを理解できないという表情で

聞いた。

「そう、現に存在しているからには、それには理由があるはずだ。私はね。GのDNAを組み込まれただけの、いわば人工の巨獣と、Gそのものとの違いは、細胞内共生生物の有無ではないか……と、考えているんだ」

「あ……!!」

紀久子といずもが同時に声を上げた。

そう、伏見たちのことがあって、すっかり記憶の片隅に追いやられてしまっていたが、Gの心臓の細胞からは八幡の予想通り、新種と思われる細胞内共生生物が見つかったのだ。そのことを、干田達は知らない。

「ボルバキアという、昆虫などの無脊椎生物の細胞内に共生する細菌群は、自分たちの生き残りに都合の良いように、宿主の健康状態を整えたり、習性を変更したりすることで知られている。著しい例では、遺伝子配列までも変えてしまう例まである」

「それでは、試してみるということのは……」

「そう、巨獣化しかけているサンに、Gの細胞内共生生物を寄生、いや共生させて、経過を見ることだ」

「で、でも、培養細胞での実験では、あの共生生物は、細胞自体にはほとんど何の影響も与えていないはずではなかったのですか？」

その際のデータ採取をしたいずもが、納得いかない様子で問いかける。何時間も培養細胞の観察をし続けたが、細胞分裂のペースに

も、細胞自体の形状にも、何の変化もなかったのだ。

「ところがそうでもないんだ。たしかに培養細胞の挙動自体に変化はなかった。だが、ただ変化がないというだけじゃない。温度条件やPHをかなりドラスティックに変化させても、ほとんど外見に変化がなかったんだ。君はおかしいとは思わなかったのかね？」

「そつえば……」

「これは仮説に過ぎないが、おそらく環境条件が変化しても、それを敏感に察知して、その変化に対応できるように、宿主の細胞の性質そのものを変えてしまふ力を持っていると私は推測している」

「つまり、Gはその細胞内共生生物のおかげで、不死細胞を得ながらも、暴走せずに済んでいる……と、そうお考えなのですか？」

「そうだ。そのGに特有の細胞内共生生物……ここでは便宜上、ポルバキアと似て非なるものという意味を込めて……メタポルバキアでも仮称しておこうか……それがそもそもG細胞の不死化と、それに伴う巨獣化を引き起こした原因でもあるのだろう。」

だが、Gの個体としての生理作用の正常化を行い、筋肉や骨、皮膚の強化によって巨大化に伴って発生する問題をカバーしたり、必要以上の巨大化を制御したりしているのもまた、このメタポルバキアではないかと私は考える。だが、これはシャーレ上での培養実験では結論が出ない。どうしても、生きた個体の細胞に共生させてみなくては……」

「しかし、そのことでサンがさらに巨大化したら……」

「今のまま放つて置いてても、サンの巨大化は止まらない可能性が高

い。そうであるなら、処置をしてもしなくても、いずれはサンを処
分せざるを得なくなるだろう」

「……………」

「なにより、もしも伏見君たち親子に、万が一巨獣化の傾向が見ら
れた時、打つ手を確保しておきたいんだ」

「わかりました。やりましょう」

いずもがハッキリと答えた。しかし、紀久子はまだ迷っている様
子だ。

「そこまでしてしまつて……………それでもサンは、ニホンザルと言える
のでしょうか？」

「私が言えるのは、ニホンザルであろうとなかろうと、それがサン
という一個体であることに変わりはないということだけだ。それに、
私も彼を単なる実験体などとは思っていない。感情も尊厳もある
一つの命だ。

「たくさんの生き物を、こんな実験に使つてしまつていゝことを…
…そういう研究に職を得ていることを悩むこともある」

「先生……………」

「だからこそ、今は少しでも希望を持てる対処をしたいんだ」

§5 深海の恋

§5 深海の恋

明がこの研究所に来てから、すでに2週間が過ぎようとしていた。

「今日って、明君の誕生日なんやってね？」

その日、紀久子は目を輝かせながら、明に聞いてきた。最近、紀久子は端々に京言葉を使う。次第に明に心を開き始めているのかも知れなかった。

「な……なんでそれを、知っているんです？」

「えへへ。伏見先生に聞いたかった」

「まさか、海底で20歳を迎えるとは、思いもしませんでしたけどね」

「で、ね。こんなの作ってみたんやけど……」

紀久子が隠すように後ろに回っていた手を前に出すと、そこには白と黒の奇妙な物体が乗った皿があった。

丸くとのえられた白い台に、黒いペースト状のものがごちゃつと塗りつけられ、その上にはクッキーやイチゴでデコレーションされている。

「……これって??」

「えつと……ほんまはケーキ作ろうと思ったんやけど……こんな海底やから、材料も足りないしオーブンもなかったの、それで……」

「あ！ これ、あんこですか？」

「うん。あの……おはぎをケーキ風に飾り付けしてみたんやけど……」

明は思わず笑い出した。見れば見るほど、おはぎで丁寧に作られたケーキは可愛らしく、純朴そうで和風な紀久子のイメージにピッタリだったからだ。

「……そんなにおかしい？」

紀久子は、口をとがらせて、少し不満そうに、笑い続ける明を見ている。

「いいえ、うれしいんです。本当にありがとうございます。こんなうれしい誕生日は、生まれて初めてかも知れません」

明の母は、明が物心ついた時には、すでにガンに蝕まれ、闘病生活に入っていた。父は自身の研究のためというよりは、母の病気のために、細胞学の研究を続けてきたこともあって、よほどのことがない限り、帰宅はいつも深夜だった。

だから、一人っ子の明は、家族にも誕生日を祝ってもらったことは一度もなかったのだ。

「そんな。明君、それはおおげさだよ……」

笑いながら言いかけた紀久子は、明の目に光るものを見つけて言葉を切った。

「そ……そうそう、いずもちゃんも呼んであげようか？今日、彼女非番だから……」

「いえ、せっかくお休みなのに、お呼びしてはマズイですよ……その……」

「え？」

(ぼくは、あなたがいれば、それで充分なんです。)

その言葉は、どうしても口に出せず、明は黙って紀久子を見つめた。

「そ……そうそう、お父さん……伏見先生も、明君に会いたがっていたんやよ」

紀久子は、なんとなくだが、明の気持ちを察したのが、目をそらすと、伏見助教授の話の始めた。

「ごめんなさいね。二人を一緒にすると、相互に影響を与え合う可能性があるって……これは伏見先生自身の意見なんやけど」

「あの……父は、元気ですか？」

「うん、お元気だよ。結論を出すにはまだ少し、時間が掛かるだろうけど、今のままなら一ヶ月くらいで、普通の生活に戻るかも知れないって」

「……………そうですか」

明は、少し残念に思った。一ヶ月というと、あと二週間くらいか。地上に帰ってしまえば、海の底のラボにいる紀久子には、二度と会えないかも知れない。

「そうそう、あ…………あのね。いずもちゃん、私も知ってる研究員の人に、しつっこく食事誘われてたよ。明君、もう少し積極的に動かなきゃダメだよ」

「ええ？ そうなんですか？ そりゃ、まいったなあ」

明は少し驚いて、困ったふりをしながら、苦笑いした。

「ほらあ。そんなんだから、なかなか相手にしてもらえないんだよ」

「すみません。そうそう、でも、松尾さんは誰かに誘われたりしないんですか？」

明は、さりげなく聞いたつもりだったが、紀久子は顔を赤くして黙り込んだ。

「す…………すみません。悪いこと聞いちゃいましたか？」

「…………どうして？」

「え？」

「…………どうして、そんなこと聞くんですか？」

紀久子の目は、まっすぐ明を見つめていた。

(それは……ぼくが、松尾さんのことを好きだから……)

明は、のど元まで出かかったその言葉をのみこんで、できるだけ明るく微笑んだ。

「そりゃあ、松尾さんだってそういう事あるのかなって、そう思っただけですよ」

「そう……ですか」

紀久子は少し寂しそうにうつむいたが、明は、心の中で胸をなで下ろした。

明は、何があるかと、自分の気持ちを告白しないつもりでいた。自分がG細胞の影響下にあり、今後どうなるか分からない、ということもあった。だが、一番に思うのは、紀久子を傷つけたくないということだった。

明は、自分がいずもものごとを好きだと思いこんで、世話好きのお姉さん気取りで、色々と気をつかってくれる紀久子と話すうち、彼女をますます好きになっていった。

だがおそろく、だからこそ無防備に、自分に心を開いてくれているのである事も理解していた。

今さら、本当は自分の好きなのは紀久子だ、などとは言えないし、それを知って傷つく紀久子を見るくらいなら……いや、今の紀久子の笑顔を見られなくなるくらいなら、自分の思いなど、永遠に押し殺しておけばいい。

明はそう思っていた。

「私ね。明君のこと、大好きだよ。」

いきなり紀久子に言われて、明は心臓が止まるほど驚いた。

「なんか、明君といると、うちの弟を思い出すの。最近、会っていないからかな。昔はケンカばかりしてたけど……」

「へ……へえ、そうなんですか？」

「うん。明君は、うちの弟より年下やけど、なんか、ずっと大人っぽく感じるなあ」

「ま、そりゃあ、何度か死にかけてますからね。少しは人間的に成長しなきゃ……」

そう冗談めかして言いかけた明は、紀久子の怒りの表情を見て口をつぐんだ。

「そんなこと、冗談っぽく言っちゃだめだよ。どんなに伏見先生が、心配してらっしゃったと思うの？」

「……すみません」

明は、素直に謝った。紀久子のむき出しの優しさに触れた気がして、胸に熱いものがこみ上げてくる。

「ううん……私こそ、ごめん。怒ったりするつもりやなかったんやけど……」

「いいんです。そんなに真剣に怒ってくれて、むしろ、御礼を言わ

なくちゃ。ありがとうございませ……」

少しだけ気まずい沈黙が流れた。

「あの……」

「えっと……」

二人は同時に話し出そうとして、顔を見合わせた。

「あ、松尾さんからどうぞ」

「いえ、明君から……」

「じゃあ……その……今日は、ありがとうございました。松尾さんの誕生日も、お祝いさせて欲しいから、教えてもらえますか？」

「あ……はい。あの、9月9日……なの」

「へえ、じゃあ、まだ半年以上先ですね。」

「あの……あのね、私、名前もそれでつけられてしもうたんやよ」

「え？」

「9月9日は重陽の節句っていつて、菊の花を飾るんやって」

「ああ、だから紀久子さん……か」

言ってしまうってから、明は初めて紀久子の名前を呼んだことに気

づいて、耳まで赤くなった。しかし、当の紀久子は何も気づいてない様子で微笑んでいる。

「そうなの。父がつけたんやけど、ほんま、いい加減なんやから」

「あ、あの、それで松尾さんの言いかけていたのは、何だったんですか？」

「えっと……今度はいずもちゃん連れてくるから、元気……出してねって」

それを聞いた明は、思わず吹き出しながら言った。

「僕は元気ですよ」

「うん。元気そうやわ」

二人は顔を見合わせて、笑った。

§6 巨獣化の兆候

§6 巨獣化の兆候

「松尾君、すまないが、ちょっとこのデータを見てくれたまえ」

八幡に呼ばれて、紀久子はパソコンのモニターをのぞき込んだ。そこには、表計算ソフトに伏見親子の計測データが並んでいた。

「このデータが、どうかしたんですか？」

「たしかに、二人とも身長、体重、胸回りなどの測定値はほとんど変わっていない。しかし、頭部の計測値を見てみたまえ……」

「あー！頭部外周が、急に大きくなって……」

紀久子は言われてやっと、データの変化に気づいて息をのんだ。

落ち着こうと思っても、足がガクガク震えているのが自分でも分かる。二週間以上もの間、何の変化もその兆候も見られなかったため、紀久子はすっかり安心してしまっていたのだ。

「そうだ。ここ5日間で伏見君が1センチ、明君が2センチのサイズアップ。これは、測定誤差ではあり得ない。良くない兆候だぞ。」

「先生……どうしたら……」

紀久子は泣きそうな顔を八幡に向けた。

「雨野君。メタボルバキアを接種した、サンのサイズ変化のデータを見せてくれたまえ」

「これです」

横で冷静に話を聞いていたはずもが、さっとプリントアウトした紙片を八幡に手渡した。

「接種後もサイズアップは続いているな。巨獣化が止まったとは言えないが……」

「しかし、明らかに処置直後から、ペースダウンしています。」

「いずれは比較的冷静だ。たしかに、サイズアップのペースはこれまでの成長率と比較すると、十分の一程度に落ちていた。」

「完全ではないかも知れないが、今のところ唯一の有効な手段と言えるな。彼らにもサンと同様の処置を施してみる価値があるだろう。伏見君と相談してみよう」

メタボルバキアの接種作業は、かなりな大手術になる。前もって対象の細胞、つまり伏見親子の健康な細胞をシート状に培養しておく、これにメタボルバキアを感染させる。

そして、内視鏡とマニピュレータを用いて、心臓の筋肉にこの細胞シートを貼り付けるのだ。こうした場合を考えて、二人の細胞シ

トはすでに作成されていたが、さすがに手術は本人に何も知らせずに行うわけにはいかない。

その夜八幡は、明の父、伏見伊成と共に彼の病室を訪れた。

「明、体の調子はどうだ？」

伏見は、息子の体を気遣って声をかけた。

「父さん。もうオレ達、会っても大丈夫なのか？」

「今日は特別なんだ。もう一度聞くぞ。体の調子はおかしくないか？」

「おかしいどころか、めっちゃくちゃ好調だよ。特に頭がスッキリしててさ……今勉強したら、もっと楽に大学合格できたんじゃないかと思うな」

「……そうか、やはりな」

「は？ どういうことだよ」

「今から言うことは、とても大事なことだ。気をしっかり持って聞きなさい」

伏見は、自分自身をも落ち着かせるかのように、深く何度か深呼吸してから口を開いた。

「お前も、私も、G細胞の影響が出始めている。特に、頭の大きさが大きくなり始めているんだ」

「あ……頭あ？」

明は素っ頓狂な声を上げた。G細胞の影響で、部分的に成長するなんて話は初耳だ。

「いいか明。G細胞の特徴は、細胞が不死化していくことだ。体細胞でも神経細胞でも、死なないで変化し、別の組織細胞として組み換えられていく……」

「……………」

「つまり、別の場所で寿命を終えた細胞は、よく使う場所の細胞として変化していく可能性が高い。

たとえば、毎日トレーニングしているアスリートなら、筋肉の増大が起きていただろうが、我々はそういうことの無いように安静にしていた。そのせいで、脳に細胞が集まったのではないかと……推測できる」

「……………じゃあ……俺たちはどうなるんだよ？」

「最終的にどうなるかは……分からない。

人間にG細胞を組み込んだという事例は全くないんだ……だが、人間に最も近いほ乳類、特にサルの場合では、通常の個体の10倍程度の大きさにまで巨大化しているそうだ」

「……………そうか」

明は壁の方を見て、伏見とは目を合わせないようにしながらつぶやいた。

「明……驚かないのか？」

相当なショックを受けたはずなのに、不思議に冷静な明を見て、伏見も八幡も少なからず驚いて顔を見合わせた。

「ここに連れて来られた時点で充分驚いているよ。父さん」

「そうだったな……明、父さんのせいでこんなことになってしまつて……すまん」

「ちがうよ。父さん。謝るのはオレの方さ」

明は、そらしていた目を伏見に向け、自分を見つめる父の目を見つめ返した。その目に光る涙を見て、伏見は息を呑んだ。

「おまえが……謝るだつて？」

「そうさ。オレがガンなんかにかかったせいで、無理して、オレをこんなところにまで連れてきたんだろ？ その上、父さんは自分にまでG細胞なんてものを組み込んでさ……」

「あ……明、おまえ……」

「もう、いいんだ、父さん。」

おかげで、ほんのしばらくでも、何の苦痛もなく過ごすことが出来たんだ。ここへ来てからもさ、いい思い出も出来たんだぜ……たとえ、オレが巨獣化して危険な存在になる前に、死ななきゃいけないとしても、オレは受け入れるよ」

伏見の目から、涙があふれ出した。そして息子の肩を引き寄せる

とぐつと抱きしめた。

押しとどめようとしても、後から後から涙が溢れてくる。もう、
なにも話す言葉はなかった。

「明君……君は、本当に優しい子だな」

八幡が、やはりその目に涙をためながら、二人に話しかけた。

「だがな。そういう覚悟をするには、少し、気が早いぞ」

「そう。そうなんだ。明。まだ、一つだけ打つべき手が残っている
そうなんだ」

伏見と八幡は、明にメタボルバキアについて話した。

「メタボルバキアの、人体内での挙動もまた、未知数だ。今、二ホ
ンザルの実験体であるM-09・サンの巨獣化も、完全に止まった
とは言えない。だが、少なくとも無制限な細胞増殖と自己崩壊の危
険だけは避けられるはずだ」

「いいよ。ここまで来たら、どんな処置でも受けるさ」

「すまん」

「父さんは、そればっかしたな。そんな謝るなって。それに、もし
かしたら、不老不死のスーパーマンになれるかも知れないだろ？」

「そう。そうだな。そう信じよう……」

笑い会う親子の哀しい姿に涙しながら、なんとかメタボルバキア

が効果を発揮してくれることを、八幡は心から願った。

巨獣化が始まってしまった以上、一刻も早く処置をしなくてはならない。翌日、まず明へのメタボルバキアの接種が行われることになった。

「明君……頑張つてね」

紀久子は、全身麻酔の前の鎮静薬を手渡しながら、明に声をかけた。

「大丈夫ですよ。そんな心配そうな顔しないでください」

心配そうな顔の紀久子に、明はにっこり微笑んで見せた。

「手術を開始する」

全身麻酔であつという間に意識を失った明の前に、八幡が宣言した。

医師免許も持っている八幡が執刀医だ。麻酔科医の役は、やはり医師免許を持つ伏見である。助手の役は、紀久子といずれもが分担していた。

オブザーバーとして、白山、東宮、干田、石瀬の4人も顔を見せている。

明の脇腹から内視鏡が差し込まれ、メタボルバキアを感染させた

明自身の細胞が、別に空けられた穴から特殊なマニピュレータに取り付けられ、体内へと挿入されていく。

そして、心臓の表面へたどり着くと、その細胞シートを丁寧に貼り付けるのだ。

大手術とはいえ、心臓自体を傷つけたりするわけではないため、施術自体は用意である。

「よし、完了だ」

傷口を縫い合わせ、医療用接着シートで皮膚を貼り合わせた後、八幡は、ふうつとため息をついた。

「では、少し休んだら、伏見君の手術を行おうか」

休憩室でコーヒを飲みながら八幡は、手術の緊張から解放されてくつろいでいるメンバーに話しかけた。

休憩室といっても、部屋ではない。廊下の一部が広がっていて、数人分のソファがしつらえてある、ラボや工場にありがちな空間だ。

「お疲れ様でした。でも八幡先生……伏見先生が補助につかれなくて、助手が私達だけで大丈夫でしょうか？」

紀久子が少し心配そうに言う。

そこには既に手術を受ける準備に入っている伏見と、その世話をしているはずの姿は見あたらぬ。麻酔科医の役を不慣れな紀久子が行うのは、人体に不慣れな執刀医の八幡にとっては、かなりなハンデと言える。

「なあに、私の腕も馬鹿にしたもんでもない。いくらブランクがあったって、処置内容そのものは単純だし、一度やったことをそうそ

う失敗したりはしないさ。君達は、私の指示通りに動いてくれればいい」

「しかし、すごい手並みでした。八幡先生は、医師免許はお持ちと
いっても、相当ブランクがあられたでしょうに」

東宮が見え透いたお世辞を言ったが、格下の自分が褒めること自体、かえって失礼なことには気づいていないらしい。

「ああ、まあ、こんなことを言っただけは明君に叱られるかも知れないが、サルやネズミより人間は大きいから、むしろやり易かったよ」

気の良い八幡は、そんなことは気にもとめない様子で言葉を返した。その時、突然後ろから声かけられた。

「先生。伏見先生の準備はできました。あとは麻酔導入するだけです。」

手術の準備を終えたいはずもが、いつの間にか後ろにやって来たのだ。ことさらに今の会話を無視したようないずもの態度に、東宮が少々むっとした顔を見せる。

「ん……わかった。だが、あと5分ほど休憩してから、始めよう」

「八幡教授、今回の施術は、大変に異例な措置だとおわかりですね？」

それまで黙ったまま会話を聞いていた干田が、口を開いた。

防衛大学の職員でもあり、防衛庁からの出向研究員の干田は、日本政府からのお目付役であった。G細胞という研究対象の性質上、

防衛上問題のある事態に陥りそうな時には、その事を日本政府とWHO本部へ報告する義務を負っているのだ。

「もちろんだよ、干田君。」

そもそも、メタボルバキアと仮称しているこの細菌さえ、おそらく新種であつて、その挙動も性質も不明なんだ。これが人体実験であることは私も理解している……だが、彼等親子の生命の尊厳を守り、人類の危機を招かないようにするために、これは必要な措置だとも思っている」

「その……メタボルバキアですが、これまでの培養結果から見てもやはり偏性寄生性を示すリケツチアの仲間であることには、間違いないだろうと思います。」

WHOに所属しているせい、細菌学にもそれなりの知識を持つ、石瀬も口を挟む。

「そうだろうな……少なくともリケツチア目の真性細菌である可能性が高いだろう」

「そうだとすると、未知の重篤な病原性を顕す可能性も否定できないのではないですか？

バイオハザードの危険もある以上、伏見教授親子には、たとえ手術が成功したとしても、一生研究室で過ごしていただかねばならないかも知れません」

険しい表情で干田が付け加えた。

「……………うむ」

干田達の言うことももつともである。今は、最悪の事態を回避するために、次善の措置を行っていることは確かだが、それによって感染症の拡大といった危機を招くような事は出来ない。

紀久子もいずも、何も反論できず黙ったままだ。

「その時は明君たちは一生……」

言いかけた紀久子が、途中で言葉を切った。

「……………ん？どうした、松尾君？」

八幡が紀久子を見ると、驚いたように見開かれた目は八幡の斜め後方、コーヒースーバーの向こうの通路に向けられている。

「八幡君、君らはなにやら、余計なことをやらかしてくれたようだな。これは非常に困る。困るんだなあ」

「あ……………あんたは……………どうしてここに？」

§7 暴走シュライン

§7 暴走シュライン

突然声をかけられ、振り向いた八幡は思わず驚きの声を上げた。とつくに米軍に引き渡されたはずのシュライン教授が、平然とそこへ現れたからだ。しかも、でっぷり太った姿のまま、車いすには乗らずに自分の足で歩いている。

「せつかく苦勞して、人間にG細胞の巨獣化因子を組み込ませたというのに、妙なものを混ぜられたのでは、取り込めなくなるかも知れないではないか」

シュライン教授は眉間にしわを寄せ、苦々しい口調でそう言った

「な……何を言っているんだ！？ あなたは！」

まったく理解不能な事を口走るシュラインに、八幡は怒りの目を向けた。

「ああ、そういえば、まだ君達には僕の本当の姿を見せていなかったね……………」

突然、シュラインの声が急に甲高く、まるで子供のようない高い声に変わった。

「本当の……姿……だと？」

皆が呆然とシュラインを見つめる中で、干田だけが身構えた。次の瞬間、シュラインの青い瞳が、くるりと裏返ったように色を変えた。縦に細長い瞳孔が、金色に光る。

「シュライン教授……あなたは……いつたい!!」

「ふふふ。僕はすいぶん昔に、巨獣の細胞と接触してしまっただけ……」

「まさか……そんなことで!?!」

「そのまさかさ。僕は、偶然の事故で生まれたキメラなんだよ。五十年ほど前、瓦礫の下に見捨てられ、Gと巨獣の戦闘に巻き込まれたんだ。その時、偶然、その巨獣の体液を傷口に浴びなかつたら、そのまま死んでいただろうがね……」

「ばかな!?! そんな単純なことで高等生物の遺伝子組み換えが起きるなら、誰も苦労はしない!!」

八幡の言うのももつともだ。だが、シュラインは平然と言い返す。

「誰が『遺伝子組み換え』だと言ったんだい?」

ボクの細胞そのものは、組み換えなんかされていない、普通の人間の細胞さ。だけど、体内には人間細胞だけでなく、ある巨獣を構成していた微生物細胞と……その時感染した……細菌や寄生虫……それらが生き続けているんだよ。そして、こんな事ができるようになった」

ぞわっ、とシュライン教授の腕の皮膚がうごめいた。すると、なんと真っ白な体毛が生えるように見えたかと思うと、そこから一匹

の白いネズミが現れたのだ。

「な……なんだと!?!」

他の皆を背中にかばうようにして前に出ていた干田が、その、あまりにも意外な展開に思わずうめき声を発した。

見る見るうちに、シュラインの顔面がまるで内側からなにかに押されているかのように波打ち、変形し始めた。顔の骨格自体が飛び出したかのような錯覚を受ける動きの後、黒褐色の毛が真っ白な皮膚の下から湧き出すように生えてきた。その変形した毛むくじやらの突起は、小さな手のように見え……その手が頭を押し広げるようにしたかと思うと、金色の瞳孔を持つ小型のサルが頭部からはい出てきたのだ。

「きゃあっ!?!」

あまりの薄気味悪さに、思わずいずもが悲鳴を上げた。

さらにわずかに皮膚の見える足首にも、茶色や白の毛が生えたように見え、その次の瞬間には、まるで剥がれ落ちるように、そこから数匹のネコが現れた。

腹部からは、はだけた白衣を破って中型犬が、肩の辺りからはさらに小さなネズミが……シュラインの体からは、次々と何種類もの生き物が分離していく。

数十秒後、シュラインの体から現れた数十匹にも及ぶ生物たちが、まるでシュラインを守るかのように取り囲んでいた。

すっかり痩せた……いや、小さくなったシュライン教授の姿を見て、全員が息をのんだ。

「!?!……子供?」

紀久子が思わずつぶやく。

そこにいたのは、八十代の老人ではなく、どう見ても十代前半にしか見えない、ブロンドの少年だった。欧米系の整った顔立ちに青い瞳……まるで、そのまま宗教画から抜け出してきた天使のような、ありえないほどの美しさである。

しかし、その表情は妙に大人くさく見え、細くつり上がった切れ長の目が、さらに冷酷な印象を与えている。

そこに居合わせた一同は、一様に呆気にとられて少年を見つめた。

「ああっ!?! この子……あのときの幽霊!?!」

声を上げたのは、いずもだった。

たしかにその姿は、いずもが明の個室前で会った、『素早い、キレイな幽霊』に違いなかった。

「ああ、君か。あの時はすまなかったね。でも、傷は治してあったらどう?」

につこり笑うと、ひょいと立ち上がる。身長は百四十センチくらいだろうか。

すっかり肉が無くなり、だぶだぶになった白衣の胸がはだけて、なまめかしい艶のある肌があらわになっている。

とてもさつきまでの老人と同一人物とは思えない。

「ボクはね。色んな生き物と一つになることができるのさ」

「つ……つまり、『群体』ってことか?」

それまで、あまりの事態に言葉を失っていた東宮が、やっとの思いで口を開いた。

「そう。その表現はある意味、的を射ているかも知れないね。だけど、群体と言ってもサンゴやクラゲのそれとは少々違う。一度取り込めば、融合も分離も自由自在。もちろん、彼らにもちゃんと思いはあるけれど、ボクの意味でも自在に動く」

そう言うと、ひょいと足下の茶色いトラ模様のネコを指さし、そのままぐるりと円を描いた。すると、ネコはそれに合わせて、ぐるりと回った。

「この程度なら、サーカスでもやるだろうけどね……」

さらに大きく手を回し始めると、今度は周囲すべての生物が、ぐるりと回った。

イヌやネコだけではなく、ネズミも、サルも、ウサギも……まったくの時間差なしにくるりと回った。

「すごいでしょ？」

少年は得意げに笑う。

「雨野君！どうしたんだね!？」

八幡の声に驚いて、皆がそちらを見た。するといずれもが呆けたような表情をして、その場でぐるりと回っているではないか。

「あ、せんせえ……わたし……なに……」

「いずれもちゃん!?! しっかりして!?!」

その場にへたりこんだはずもを、紀久子が抱き起こそうとする。

「待ちたまえ!!!」

鋭い声を発したのは、伏見だった。

いつの間にかシュライン少年と対峙する伏見達の後方に立っている。手術用の患者服姿の伏見は、苦しそうに壁により掛かっていた。

「不用意に彼女に触ってはいけない。彼女は……感染しているんだ」

「ど……どういことですか!?!」

「へえ。こんなにすぐに、ボクのしたことに気づくとは思わなかったよ。伏見センセ?」

くすくすとシュライン少年が笑う。

「私も今、理解した。ヤツは様々な生き物と融合して操れる。つまり、それが動物でも人間でもかまわない、というわけだ」

八幡教授がつばやいた。

「そう。その通り。よくできました。」

付け加えるなら、このシートピアアカデミーの人間の半分くらいは、すでにボクに感染しているんだ。すごいでしょ?」

紀久子はあわてて、いずもから手を放して飛び退いた。

へたり込んでいるいずもが、急に目の前のシュライン少年と、まったく同じ口調で同時に話し始めたからだ。

「体液の接種をするだけで良いんだけどね。完全に同化するには、少々時間が掛かるのが難点なのさ」

いずもは完全に無表情で、視線を宙に漂わせながら、口調だけがシュラインと同じである。不気味なことこの上ない。

「松尾君、それに白山君達も、ラボ内でイヌやネコ、ネズミを見たことはないか？」

「……ありません」

「私も」

「ぼくも、ないです。」

八幡の問いに、そこにいる全員が、首を横に振った。

「では、おそらく、我々はヤツの細胞に感染していない。狙われなかったのは、伏見君達に関する研究に関係があるはずだ。そうだな？」

八幡は、鋭い視線をシュライン少年に向けた。

「さすが、切れ者と噂の八幡教授だね。」

その通りだよ。伏見親子にはG細胞と充分に同化してから、その細胞を提供して欲しかったのさ。それまでなるべく余計なモノを混ぜたくなかったからね。雨野君の場合は、廊下で出会ってしまったから不可抗力だったんだ。しかし、ちよっと君達を放置し過ぎちゃったみたいだね」

シュライン少年は、にこやかな表情を崩さないまま、淡々と説明していく。

「八幡君がGから採取したっていう妙な細菌だけど、巨獣化を制御しちゃうそうじゃないか……そんなの接種されたりしたら、とても邪魔なんだ」

「……さっき、私を吸収する。そう言ったな？」

伏見が、つらそうに胸を押さえながら立ち上がった。

「そう。そうだよ、それが大事なんだ。それこそが、ここに来た目的でもある」

細められていたシュライン少年の目が、さらにすうつと、糸のように細くなった。

「伏見先生？ どうして、胸を押さええておられるんです!？」

紀久子が聞いた。

「君たちの声が聞こえて、緊急事態だと思ったんでね……自分で胸を切り開いて、筋肉内に細胞シートを埋め込んだ」

言いながら、にやりと伏見が笑う。

「なんて無茶なことを!! メタボルバキアは、Gの心臓からしか発見されなかった細菌だ。心臓でない場所にメタボルバキアが定着するかどうかは、分からないんだぞ？」

八幡が倒れそうになる伏見に、思わず駆け寄って肩を貸した。

「いや、賭ではありませんが……どうしても、すぐにメタボルバキアを体内に入れておく必要があったんです」

「メタボルバキアの免疫抗体で、シュラインの細胞による侵食を防ぐつもりだったのか？」

そのやりとりを聞いていたシュラインが、怒りの目を伏見に向けた。

「フン。確かに君の狙いは正しいよ。」

僕が恐れていたのもそれさ。だけど、ほんの十数分で、免疫抗体ができるわけがないだろう？ 今すぐ、あんたから体液だけいただいて、妙な細菌に冒された肉体は取り込まなければ済む話さ！！」

「なら、やってみる！！」

「言われるまでもないさ！！」

シュライン少年の周囲にいた動物たちが紀久子達の足元をすり抜けると、蹠踵と立つ伏見に一齐に飛びかかった。

「八幡先生！ すみません！！」

伏見は、自分を支えてくれていた八幡を突き飛ばし、自ら動物の群れに飛び込んでいった。手近にいた十数匹の動物に次々に飛びかかられた伏見は、まるで毛皮の団子のようになってしまうが、それでも倒れることなく立っている。

「伏見先生!!」

紀久子の叫び声が響く。

「これで、ようやく次の段階に進めるな」

シュライン少年は、口元をゆがめ、まるで老人のような表情でつぶやいた。しかし、伏見に飛びかかった動物たちは、そのまま団子状になって動かない。

「どうしたお前達？ 体液を採取したら、そいつに用はないぞ？」

いつまでも動かない毛皮の塊に、シュラインが不信の目を向けた時。

「どうやら……思い通りにはいかなかったようだな」

伏見の苦しそうな声が響いた。すると、毛皮の塊の一部……頭のあたりに取り付いていた三毛猫が、ぼろりと落ちた……と見るや、その下からは、噛み傷から血を流した伏見の顔が現れた。

落ちた猫は、立ち上がるうとしながらも、それを果たせずにもがいている。

「な……なんだ貴様!？」

シュライン少年の声に初めてとまどいの響きが混じる。

「たしかに急いでメタボルバキアを入れたところで、免疫が出来るには普通、数週間は掛かる。

だが、メタボルバキアの作用そのものは劇的だ。メタボルバキア

は、体内に入ると同時に私のG細胞因子を認識し、個体としての再生能力、外敵に対する反応を最大限に発揮しようとする……」

伏見が手で払い落とすたびに、次々に床に落ちていく動物たちは、死んでこそいないものの、あるものは体を痙攣させ、あるものは足を引きずって逃げようと、一匹として無事なものはいない。

「ぐう……何だこれは！！ それだけで、こんな症状にはなるまい。貴様いったい、何をした！？」

シュライン少年の問いには答えず、伏見は八幡に言った。

「お前に教えてやる義理はないな。」

八幡教授。全員後ろの施術室へ！ 私もすぐに行きます！！」

「う……うむ。わかった。みんな、行こう」

八幡は、全員を促して術室へ逃げ込んだ。その後を、放心したようないずもを抱え上げるようにして伏見が続く。追いつがってきた茶色い中型犬を蹴飛ばして、内側からドアをロックすると、伏見はふうつとため息をついた。

「いったい、どういう事が起きたのか、説明してもらえらるんだろうね？伏見君」

八幡の問いはもつともだ。

「つまりは、私自身を実験台にすることで、ようやくG細胞の本質が分かってきたのです」

「それはいつたい、どういう意味だね？」

「まず、ヤツの……シユラインの体内に入り込み、あんな怪物に変えたのは、G細胞ではないということですよ」

「それは確かに、ヤツ自身もそんなことを言っていた。巨獣を構成する微生物だと……」

「おそらくは、ある巨獣を構成していた微生物群体が人間の体内に入り込んで、擬似的な不死性とともに、他種の生物とも群体を作る力を獲得したものでしょう」

「つまりは、完全な融合体ではない……ということか？」

「ヤツ自身も、そこに弱点があると分かっていたのでしよう。だから、G細胞のサンプルを欲しがった。おそらく自分が必要とするG細胞の性質を獲得するために……」

「そこまでして……ヤツの目的は何なんだね？」

「それは私にも分かりません。ただ、私の推測に過ぎませんが、ヤツの言っていた事の半分はハツタリだろうと思います」

「なに？」

「まず、分離した生物を自分自身だと言い放ち、またあれだけの数を操りながら、どの動物も一定距離以上、ヤツから離れようとしませんでした」

「それは、そういう命令を出していたからじゃ……」

東宮が口を挟んだ。

「いや、たしかにあれだけの数がいて、易々と我々を逃がしてしまつたのはおかしい」

干田が、考え込むようにつぶやく。

「こういうことです。肉体が融合した状態ならまだしも、分離してしまえば、遠隔で操る方法は限定されます。音波、臭い、電磁波……」

「……あつ……そうか。受信方法か？」

白山が何か気づいたように声を上げる。

「なるほど。どれも受信側にもルール作りが必要な上に、一体ならまだしも、複数個体にそれぞれ別々の行動をとらせるのは無理がある」

「その通りです」

「それと、ヤツの言っていることが本当なら……あの能力から推測して、体液をかぶつたという相手は、五十年前東京湾に現れたあの巨獣ではないかと思われます」

「五十年前……そうか。汚泥中の原生動物やバクテリア、菌類、環形動物までもが一匹の海獣を核にして、それまで例を見ない異種群体を形成した例があつたな」

「そうです。そして上陸したその群体型巨獣はGと戦って敗れ、元の汚泥状に分解されてしまった。おそらく、シユラインはその巨獣の影響を受けたのでしょう…」

「し、しかし待て、伏見君。君はどうしてそこまで、あの一瞬で推測ができたんだ？」

「ですから、申し上げたでしょう？G細胞の本質が分かってきたと」

「まさか……G細胞によって、君自身にも、何らかの変化があったということかね？」

「その通りです。さつきから……そう、シユラインの変化を目前にしてから更に、まるで自分が自分ではないような、思考力と集中力のアップを感じています。原因は、G細胞以外にないでしょう」

「脳細胞までも、不死化と同時に、特殊な機能を得たということかね？」

「いえ、べつに特殊な機能ではありません。脳細胞もまたアポトーシスを起こさないことによって、脳内のニューロンネットワークのすべてが無駄なく連動するようになったと考えるべきでしょう」

「そうか、もしかするとシユライン自身も、同様な効果を得たことで、天才科学者に成り得たというわけかも知れないな」

「それは分かりません。しかし、50年も前から、他生物と融合をしてきたという割には、動物の種類も数も限定されすぎていました。融合時に太った老人の姿を取らなくてはならなかったことから見

ても、ヤツ自身は巨獣化もできない可能性が高いですし、ヤツの細胞に感染したとしても、コントロールさえされていなければ、治療法がある。そう考えるのが自然です」

そう言うのと、伏見は、意識を失ってよこたわっている、雨野いずもに目を向けた。

「じゃあ……じゃあ、彼女は……いずもちゃんは助かるんでしょうか？」

紀久子が聞く。

「わずかな接触で急速な感染症を引き起こし、生物本体の性状まで変えてしまう微生物といえば、やはりメタボルバキアと同じ、リケツチア目の細菌でしょう」

「な……なるほど」

「リケツチアなら、多くの種で、急性症状でのテトラサイクリン系抗生物質およびクロラムフェニコールが有効であるとされています。それなら、どちらもここにある。慢性化する前なら、手が打てるはずですよ」

「さ……さっそく、点滴の用意をしましょう！」

獣医師免許を持ち、内科の見識の深い石瀬が、あたふたと薬品棚に向かい、治療の準備を始めた。

「でも伏見先生は、どうしてあんなにたくさんの動物に襲われて平気だったんですか？」

不思議そうに紀久子が問いかける。

「毒だよ。細胞内共生生物、メタボルバキアが劇的に作用してG細胞を守るなら、毒を接種しても、私自身は守られるはずだ。さらに生物由来の毒ならば、メタボルバキアの適応速度も早いはずだと判断して、処置室にあった生体由来の神経毒、テトロドトキシンを静脈注射した。私の体液を接種したヤツらは、その毒で神経をやられたんだ」

「な……なんて無茶なことを！！もしメタボルバキアが能力を發揮しなかったら、君自身が死んでいたぞ！？」

八幡が目を丸くして驚いた。

「他に……手段を思いつかなかったものですから……」

疲れ果てたように、伏見が座り込んだ。

そのとき、大きなハンマーで叩くような金属音が、施術室の壁をふるわせた。次いで、ガリガリと、何か固いものでひっかくような音も聞こえる。

「くそ。ヤツめ、ついにしびれを切らせたようだな」

干田が点滴用の金属製のポールや、止め金具を使って、てきぱきとヤリのような武器を作りながら言う。さすがに防衛大学出身だけあって、こうした状況下での対応能力は高い。

「どうする、伏見君？」

この場でもっとも判断能力の高いのは伏見であると考え、八幡は問いかけた。

「ヤツの行動目的のひとつに、G細胞の性質をすべて取り込むことがあったのは間違いないはずです。」

もともと、その為にこのシートピアアカデミーに来たのでしょうか。そして、何度か自分とG細胞の適合性を試してみて、うまくいかなかったからこそ、私や息子、つまり人間にG細胞の性質を取り込ませてから、自分自身と融合させようと画策したのではないのでしょうか」

「それなら、さっきは動物たちの侵食を拒絶できたのですから、もう心配はいらないんじゃないですか？」

紀久子が、ほっとしたような表情で言う。

「いや、生体毒に対する防御機構をシユラインが持っていないとは思えません。その可能性はヤツも分かっているはずですよ。次に同じ手が効くとは限らない」

いずもに点滴をし始めた石瀬が、苦い表情で言う。

「ヤツも、こんなわずかの時間でテトロドトキシンに対応できるように進化する……と？」

千田が問う。それを伏見自身がやってのけただけに、確かに可能性はある。

「それも可能性としては考えられますが……それよりも、テトロドトキシンの効かない生物……無脊椎動物を取り込んで私を襲わせれ

は済む話です」

伏見の回答はシンプルだった。

「なるほど、単純ですが、有効でしょうね。多くの無脊椎動物にテトロドトキシンは効果がない。ここで飼育している実験動物には、昆虫や貝類もいたはずですよ」

石瀬がうなずく。

「どうするかね？意識のない明君と雨野君を抱え、脱出方法もない。しかも、ヤツらに噛まれれば、相手に取り込まれてしまう危険性がある……」

たしかに現状は、手詰まりと言えた。

「あの、奥のドアは？」

伏見がふと、部屋の奥に目をやった。

「え？」

紀久子は思わず聞き返した。それは、実験動物の飼育ルームへつながる扉だった。

§8 サンとカイ

§8 サンとカイ

「実験動物の飼育室ですけど……あの先はどこにもつながっていませんよ?」

「そうか……つまり、ヤツは私を取り込むためには、どうしてもこの部屋を通る必要があるって事か」

「しかし、この部屋のドアも限界のようだ。飼育室へ移動するしかないな」

話している間に、すでに廊下との間のドアは内側に大きくへこみ、今にも破られそうになっていた。

飼育室へのドアはせまく、ベッドは入らない。八幡がいつもを抱え、干田が意識のまだ戻らない明を背負った。

飼育室の中には、イヌやネコ、サル、ネズミ、カエル、魚類、その他石瀬の言った通り、昆虫や貝類、海生生物など、様々な種類の生物がいくつもの透明なケージや、水槽に入れられて飼育されていた。

「こ……これが、例のニホンザルですか?」

伏見が呻いた。

部屋の中央の檻に入れられていたのは、どう見ても生後2〜3ヶ月の子ザルとしか見えない、あどけない顔立ちのニホンザルだった。しかし、すでにそのサイズは、もっとも大きなオスの成体をはる

かに凌駕している。二十kg前後……人間の十歳児くらいの体重、身長といったところだろうか。

大型動物用の飼育ケージが、いかにも狭苦しく見える。

「はい。しかも、この子は驚くべきことに、すでに人間の四歳児並の知能まで備えています」

紀久子が説明した。

「それ以外の特徴は見られないのですか？」

「え？」

それ以外とはいったい何のことなのか？伏見の問いに、紀久子はとまどい、聞き返した。

「シユラインの持つ、他の生物との融合能力などの特殊能力のことです。ベースとなったG細胞そのものには、そういったものは無くとも、本来のDNA中にあつたり、ベクターのなんらかの機能を受け継いでしまつたりしている可能性もあります」

「それがあつたから、どうだと言つんだね？」

八幡が懐疑的な表情で言う。

「この子ザルの知能がそこまで高いなら、松尾君の命令で戦つてくれるかも知れない。

ヤツをここに入れるわけにはいかない以上、使えるものはすべて使つて立ち向かわなければなりません。万が一にも、ヤツを地上に放つことは出来ないのですから」

「つまり、ここでヤツを仕留めるつもりか？」

その問いには答えず、伏見は紀久子に話しかけた。

「四歳児並みということは、彼は、人間の言葉は理解できますね？」

「ある程度なら……しかし、やんちゃざかりですから、こちらの言うことを聞くとは思えませんよ？」

「それでも構いません。彼を檻から出してください」

飼育ケージから出されると、巨大な子ザルは、身軽に飛んだ。急に抱きつかれた紀久子は、二、三步よろめく。かなり重そうだ。

「サン！！　こら、離れなさい。重い〜！！」

引き離そうとする両手を巧みにかいくぐって、紀久子の背中を移動する子ザルは、一向に言うことを聞く様子はない。

「何かの役に立つとは思えないんですけど……」

結局、頭に乗っかられた紀久子が困り果てた表情で言う。

「……それより、もう一頭……」

言いかけた紀久子の台詞を遮るように、激しい衝撃音が隣室から響き渡った。ついに施術室のドアが破られたのか、なにかが飼育ルームのドアに当たったのだ。

そして、妙に明るく澄み切った、シュラインの声が聞こえてきた。

「君たち、いい加減に観念したまえよ。そうやって隠れていても、なんの時間稼ぎにもならないんだから」

「待て、シユライン。そこまでしてG細胞因子を欲しがる、貴様の目的はいったい何だ？」

八幡がドア越しに呼びかけた。

「ははは。八幡君、文字通り時間稼ぎを始めたのかい？」

いいとも。君たちには、先に教えてあげてもいいよ。どうせ、僕に吸収されちゃえば、話さなくとも理解できる事なだけけどね」

次の瞬間、轟音を立てて飼育室のドアが内側に吹き飛んだ。

そして姿を見せたのは、下半身をぶよぶよとした、白っぽい肉塊に変え、そこからイヌやネコの足や首、尻尾などをいくつも生やした、少年の顔を持つシユラインだった。

その不気味な姿に、紀久子は吐き気を覚え、手で口を押さえ、後ずさった。

「吸収だと？ その可哀想な実験動物たちですら、まともに操れもしないくせに、人間を取り込めば、なにか変わるとでも言うつもりか?!」

伏見が挑発的な口調で叫んだ。

「伏見君か。まさか細胞内共生細菌とやらが、あれほどの毒を制御できるとは思わなかったよ。私としたことがうかつだった。毒の状態が不明で再融合も出来なくてね……君に飛びかかった連中は助からなかったよ。可哀想に……だが、毒の正体が知れば、対処の

しようもある。それに、もしこのまま私がつまくG細胞の機能を取り込めれば、そうした問題もすべて片付くんだ」

「どういう意味だ？」

八幡が問う。

「タネ明かしをしようか？ 僕が自分から分離した他生物を操っているのは、生体電磁波だ。だが、私以外の動物どもの生体電磁波は微弱だね。いくら生物の種類や数を増やしても、中継器にも成り得ないんだよ」

「それは、人間を取り込んだって同じことだろう」

「そうとも。しかし、Gなら違うんだ」

それを聞いて、八幡ははっとした表情になった。

「そうか、たしかGを始め、巨獣には強力な電磁波を発する器官を持つものがあると聞いたことがある。Gの能力を欲しかったのはそれか!!」

伏見も納得のいった様子だ。

「Gの電磁波を発する力で、同化した多くの生物を操って、それで何がしたい？」

「一つになるのを」

「何？」

「この世界は、争いと悲しみに満ちている……」

シユラインの話の飛躍について行けず、全員がぼかんとした。しかし、防衛大学で世界情勢について学んできた干田は、黙っていなかった。

「巨獣大戦の影響で、今はもう、大きな対立や紛争はことごとく終結しているんだぞ。中国とアメリカの経済圏はもとより。イスラエルとイスラム諸国すら、宗教の壁を越えて理解し合えたんだ。今更何を!!」

干田の言う通り、二つの宗教が、一つの聖地を共有するという、まさに歴史的な和解によつて、十年前にパレスチナ問題は解決している。テロや戦争の火種は、全世界はもとより、世界の火薬庫と言われた中東からも、ほぼ消えていた。

「本当に、今が平和の究極かね?もう二度と何の争いも起きないと?」

「……………」

そう言われて、干田は言葉に詰まった。

そう言いながらも、世界の軍備は縮小傾向に向かつてはいない。いつ現れるとも知れない巨獣対策を名目に、軍備の拡張は各国で続けられているのだ。

しかも経済的に先が見えず、周辺諸国との国境問題などの、政治的な決着も先延ばしにしてきた日本周辺が、今や世界中でもっとも危険な地域となってしまうていたからだ。

「しょせん、一時的な平和に過ぎないのは、歴史が証明しているんじゃないかな。それだけじゃない。国家間の紛争が無くなっても、犯罪、貧困、差別は今も無くなつてはいないでしょ？」

シュラインは、馬鹿にしたようにくすくすと笑った。

「しかし……」

反論しようとした千田を、シュラインが手を挙げて制した。

「詭弁はよしたまえ。」

人間だけじゃない。あらゆる生き物は他者を殺し、食らい、同種同士もまた相争つて、あるいは利用しなくては生きていけないんだ。そして、最後はどんな生物も、個体として孤独な死を迎える。これが生命だつて？　なんと寂しく、しかも殺伐としたシステム！！」

「それが、生物であり、そのシステムこそが生態系つてヤツだ。だからこそ、進化がもたらされ、その中から我々も生まれてきたんだ」

八幡があきれたような表情で、シュラインの言葉にかぶせるように言った。

しかし、シュラインはそんな八幡に一瞥をくれると、すました顔で続けた。

「その通り。しかし、今や私という存在を得て、生物は進化という殺伐とした軛から解放たれ、ようやく次のステージに進むことが出来るのだよ」

「なんだと!？」

「分からないかね？　すべての人間が、いや、すべての生物が私と融合して一つになれば、争うことも……いや、それどころか永遠に死ぬことすらないんだ……。」

すべて同一の、私という一個体なのだからね」

「まさか、それが?!」

「私の目的だ」

「　　つ!」

声にならない声で、八幡は呻いた。あまりのことに二の句が継げなかつたのだ。

八幡だけではない。紀久子も、伏見も、干田や白山、東宮、石瀬も、全員が呆気にとられたように、シュラインを見つめている。

「そ……んなの、おかしいよ。」

その時、一人だけ声を発した者がいた。投薬が効いたのか、正気を取り戻して目を覚ましたいずもである。

「む……お前は……すでに私の一部として取り込んだはずではないのか?」

抗生物質が効いてきているのか、至近距離にありながら、電磁波の命令も効いていないようだ。シュラインの口調も焦って聞こえる。

「雨野くん、大丈夫なのか?」

「八幡先生……大丈夫……ではないみたいですけど……」

そう言つと、弱々しく笑つて立ち上がる。

「あなた……さみしいのね？」

無言のまま、シュラインはわずかだが後退した。顔からは表情が消えている。

「一時的にでも、あなたとつながった私には見えたの。あなたの心が。でも、あなたは間違っている。あなたのお母さんも、決してあなたを……」

「だまれ」

無表情なまま、シュラインの目が緑色に光った。

「だまれ 黙れ ダマレ だまれえええ!!」

シュラインのぶよぶよした下腹部から、焦げ茶色の鋭い形状をした何かが飛び出し、いずもを狙つて伸びていく。

「あ、危ない!!」

立ちすくんだいずもをかばおうとして、紀久子が突き飛ばした。その紀久子の右肩を鋭い突起が貫き、血しぶきが舞った。

「ホアー ツツ!!」

紀久子の背中にへばりついてた、大きな子ザル、サンが振り落とされて、悲痛な鳴き声を上げた。

そのとき。

「ゴガアアアツツ!!」

飼育室のさらに奥、暗く、何もいないと思われていた場所から、大きな吠え声が響き渡った。

「カイだわ。カイ!! 静まりなさい! カイ!!」

紀久子が大きな声を上げた。しかし、そのつらそうな声に反応したのか、かえって興奮したように声は激しさを増した。

「ゴツゴツゴオオオオ!!」

次の瞬間。

奥の部屋から四角い金網製の扉らしきものが、飛んできて、激しく壁に激突した。そして、それとほぼ同時に真っ黒な何か飛び出してきて、シュラインに体当たりをしたのだ。

体長2mを遙かに超えるその黒い影は、形だけはサンと同じ二ホンザルのもようであった。

「M-10だと!? 松尾君!! まだ彼を処分していなかったのかね?」

右腕を押さえながら八幡が聞いた。疾風のように駆け抜けていった巨体が、八幡の腕をかすめたのだ。

「すみません。今日、午後の便で送り出すはずだったんです」

紀久子がサンを抱きしめながらうつむく。

当のM-10ことカイはといえば、飛び出してきた勢いをそのままに、激突したシュラインごと一気に施術室を駆け抜け、廊下にまで押し出してしまった。

「……………まずいぞ。シュラインが、もしあのサイズの生物を取り込んだら……………」

八幡がつぶやく。

「いや、八幡先生。考えようによっては脱出のチャンスだ。今のうちに、第1ブロックまで逃げてください」

言いながら、伏見が前に出た。

「き……………君はどうするつもりだ？」

「これはもう、第一級のバイオハザードです。シュラインだけじゃない。私と雨野君……………そして私の息子も含めて、隔離、あるいは処分が妥当な措置でしょう」

「馬鹿な。君たちは人間だぞ。処分だなんて……………」

「我々とシュラインと、どう違うというのです？ 自分自身でも分かるんです。私の体はすでに、以前とはかなり違うものになりつつある」

そう言つと、伏見は手に持った何かを、ぎゅっと握って八幡に渡した。

「ふ……伏見君……」

それは、小さく折りたたまれた百円玉だった。並の握力では……いや、人間の握力ではまず不可能な形状に変形したそれを見て、八幡は言葉を失った。

「私は、カイと協力してシユラインを第2ブロックに封じ込めます。サンと雨野君、そして息子の明は……出来ることなら、隔離してでも生かしてやっていただきたい」

そう言うと、カイの後を追って、走り出した。その速度は、まるでプリンターのそれであった。

押しとどめようと手を伸ばしかけた八幡は、その手をぎゅっと拳に固め、壁を叩いた。

「彼の……言う通りにしよう。雨野君、歩けるか？白山君は東宮君と二人で、明君をお願いする。松尾君の怪我は……」

そこまで言うと、なんと傍らに座っていたサンが、さつと紀久子を抱き上げた。その反応の早さから見ても、サンの知能は四歳児どころではなさそうだ。

ここまでの会話を正確に理解していたことが分かる。また、体格こそ小学生並だが、腕力は大人の男性か、それ以上にあるのだろう。軽々と紀久子を持ち上げ、さつさと廊下へ出て行った。

「なんと……二足歩行まで……」

あきれたように八幡がつぶやく。

「これも、G細胞の力だったことか……」

石瀬も干田も目を見張っている。

廊下に出ると、驚くべき光景が展開されていた。

カイは駆け回ってシュラインを翻弄している。そのあまりの素早さに、その姿はほとんど肉眼では捉えられず、黒い巨大な影のようにしか見えない。

カイの動きについて行けないシュラインは、先ほど紀久子を襲った鋭い突起の狙いを定められず、カイに攻撃を加えることが出来ない様子だ。

そして伏見は、時折繰り出されるシュラインの突起攻撃の間隙を縫うようにして、体当たりを敢行し、すでに十数mも後退させている。

「伏見君！！ 私達はこのまま第三ブロックへ逃げる。君も必ず、後から来るんだぞ！！」

「八幡先生！ 我々のことはいい！！ 第三ブロックに避難できたら、すぐに隔壁を閉めてください！！ そしてすぐに脱出の準備を！！」

「八幡先生。伏見先生の気持ちを無駄にはいけない。隔壁を降ろしましょう」

逡巡している八幡を押しつけて、干田は躊躇うことなく隔壁のスイッチを押した。

「行かせるか！！ お前たちは私になるのだ！！」

声の裏返ったシュラインの叫びが、狂ったように廊下に響き渡る。

その声を押し込めるように隔壁が降りていく。ブロック間の緊急隔壁は、縦横に二重三重に重なるように閉まっていった。

§9 特攻

§9 特攻

「これならもう、破られないでしょうね？」

東宮が心配そうに言った。恐怖のためか顔が真っ青だ。

「大丈夫だろう。この隔壁は外部水圧にも耐えるように設計されているからな。手術室の ドアとは、厚みも密閉度もケタ違いだ」

「そんなことより、これからどうします？」

干田が、心配そうに八幡に話しかけた。

「とにかく、これでこの第3ブロックは孤立したことになる。ブロック内に残っている人たちを集めて、至急シュラインへの対策と脱出の方策を練ろう。」

このブロックには海上へのエレベータは接続されていないが、ウイリアム教授の機械工学研究室がある。機械工学研究室では、サンプリングロボット以外にも、深海作業用の潜行艇なども開発しているはずだ。それを利用すれば、脱出は可能だろう」

「で……でも、伏見先生をなんとか助けなくては……」

紀久子が肩を押さえながら苦しそうに言う。

「松尾君はかなり出血が多いな。応急手当をしよう。こちらへ」

「おキクさん、大丈夫？」

いづもが、心配そうに紀久子の顔をのぞき込む。

「大丈夫よ。そんな顔しないの。サンが心配しちゃうでしょ？」

紀久子の言う通り、サンは心配そうにうろつきながら、周囲の人間の表情を見て怒ったり悲しんだり、感情を露わにしているように見えた。

紀久子の応急手当を終えると、八幡達は、ウィリアム教授の機械工学研究室へ向かった。

「君達、いったい何があつたんだね？ 怪我人だらけじゃないか…
…それに、いったい何だねこのサルは」

驚いた顔で迎えたウィリアム教授は、大怪我をした紀久子や意識のない明、うろつき回るサンの異様な姿に、さらに目を丸くした。

機械工学のウィリアム研究室の内部には、彼の他に数人の研究者もおり、あわてて彼らを室内に案内した。

「ウィリアム教授、大変なことになりました。細かい説明は後でしますが… レベル4のバイオハザード事故が発生したとご理解下さい。」

干田が手早く状況を説明する。

「すでに我々の中にも、シユラインの影響を受けている者がいます。しかし、その汚染源であるシユラインは第2ブロックに封じ込めました。至急、隣の第2ブロックを切り離す必要がある。第一ブロッ

クと連絡は取れませんか？」

「いや……実は、先ほどから、まったく連絡が付かないんだ」

「何か……ありましたか？」

ウィリアム教授の暗い表情から、異変を読み取った八幡が問う。

「うちの研究生数人が、急に高熱を出して倒れたので第一ブロックの医務室へ運んだんだ。内線で経過を聞こうとしたんだが……」

呼び出し音は鳴るが、誰も出ない。こんなことはこれまで経験がなかった。確認に出ようとした時に、八幡たちがやって来たということのようだ。

「ウィリアム教授、もう向こうとは隔壁で遮断されてしまっています。東宮君、第一ブロックの様子をモニターできるようにしてくださいか？」

「は……はい!!」

八幡に言われて、東宮はどの研究室にも備えられている監視モニターの前に座り、いくつかのスイッチをONにした。が、映し出された第一ブロックの光景を見て、全員が息を呑んだ。

「死………死んでいる？」

東宮が唸る。そこに映し出されたのは、累々と横たわる、白衣姿の研究者達だった。

いや、地上へのフローティングエレベータ前には、制服姿の警備員

達も倒れているの見える。

「いや、まだかすかに動いているな。全員生きているかは分からないが、どうやら全滅してはいないようだ。ただ、相当まずい状況ではあるようだな」

「何が……あつたのでしょうか？」

いずもが問いかける。

「ガスや毒物の可能性もあるが、シユラインの言動から考えると、感染していた所員も多かったはずだ。病原性リケツチアの症状が出たのかも知れない。本来、患者同士は感染し合わないはずだが……」

「だとすると、これほどの数の患者……抗生物質がまるで足りないぞ」

石瀬が眉間にしわを寄せた。

「それ以前に、第一と第二の間の隔壁が閉められません。仮にここを脱出して第一ブロックへ移動できても、シユラインと伝染病の脅威にさらされます」

答える干田の声は冷静だ。さすがに緊急事態への心構えは出来ているようだ。た。

「それに、第一ブロックがダメだとしても……直接、海上基地との連絡は付かないのですか？」

「やっていますか……」

「海上基地もやられたか。とにかく、まずはシュラインを第二ブロックへ封じ込めよう。なんとか遠隔^{リモート}で隔壁を作動させられないのか？」

「た、たしか、こういう時のために、集中管理室システムを、他ブロックから操作することも可能だったはず。やってみます。」

今度は白山が、壁のコントロールボックスを開き、作業を始めた。

「ところでさつきから聞いていると、シュライン教授が原因だと？
彼がいったいどうかしたのかね？」

ウィリアム教授は、眉根に皺を寄せて八幡達を問い詰めた。他の
研究員達もうなずく。

突然、訳の分からない事態に放り込まれたことによるパニックと、
八幡達の勢いに押されて黙って様子を見守っていたものの、これ以上
事情を聞かすにはられないのも当然だ。

「ですから……彼が今回の、バイオハザードの元凶なのです」

説明しづらそうな表情で八幡が答えた。

「ホワアット？ なんだった？」

「彼は随分前から、巨獣細胞を体内に宿していたようです。しかも、
他種の生物や他の人間に自分の細胞を植え付けてあやつり、自身を
強化する性質をも獲得しています」

「馬鹿な。そんなSFじみた話が信じられるか。ジャパニメーション

ンの見過ぎでおかしくなったのは君達じゃないのかね？」

「たしかに荒唐無稽に思われるかも知れませんが、事実は事実です。しかもどうやら、取り込んだ生物と、一種の群体を形成するようなのです」

「なんだと……!?!？」

「まだ、全体で統制の取れた一個体には、なれないようでしたが、体から分離した他の生物を、生体電磁波であやつることもできると言っていました。」

彼の目的はG細胞の遺伝子を取り込み、巨獣化して、さらに多くの生物をあやつり、最終的には地球上すべての生き物を一つの群体生命体にするのだと……」

「異種同士で形成される巨大群体というわけか……それではつまり、我々を含めた全員がヤツのターゲットということだな」

「……そうなります」

「OH my GOD!!」

「It's not believed!!」

その言葉が終わるか終わらないかのうちに、数人の研究員から声が上がリ、ざわめきが広がった。ウィリアム教授の研究室は、ほとんどがアメリカ人だったが、中に日本語の分かる者もいたようで、八幡との会話を理解して騒ぎ始めたのだ。

「待ってください。そう騒がないで。」

「Make all quiet.!!」

八幡の声を受けてウィリアムが大声で怒鳴ると、全員が静まりかえった。

「仮にシュラインの細胞に感染しても、リケツチアの感染を治療できれば、操られることはありません。現に、この雨野君は一度ヤツに操られかけましたが、こうして治っている」

「ソレが演技でないとナゼ分かる？」

立ち上がって、欧米人特有のクセのある日本語で、八幡に詰め寄ってきたのは、長身の若い男性だった。

百九十センチ以上はあるだろうか。長身のため、羽織ったXLの白衣ですら、妙に短く見える。ジーンズをはいた長い足は、側にいた紀久子の胸近くまであるように見えた。切りそろえられた淡いブラウンの髪は、きつめにカールしている。

「君は？」

「カイン ティーケン。この研究室の准教授だ」

「プロフェッサー・ティーケン。君の質問を、証明する手段はない。」

「ホラ見る。さっきの説明だと、ソノ女はcontrolされてい
る可能性がある。少なくとも拘束しておくべきだ」

「もし、彼女が今でもシュラインの影響下にあるのなら、第一プロ

ツクの人達と同様の状態になるはずだ。ああして彼等が動けないところこそ、彼女がヤツの影響からフリーであることの状況証拠と言えるのではないかな？」

「それでも、安全を考えれば……」

「カイン、今はそんなことを言っている場合ではない。まず、ここにいる十数人の人間が、なんとか全員、無事に脱出できる方を考えるべきだ」

ウィリアム教授がカインをいさめた。

「う……」

その時、軽いつめき声を上げて、明が目を覚ました。緊迫した空気が一瞬ゆるむ。

「明君！？ 明君！！ 大丈夫？」

紀久子が傷ついた自分の肩を押さえながら、明の顔をのぞき込んだ。

「何だと？ 全身麻酔による手術の直後だぞ。少なくとも半日以上は意識が戻らないはずじゃないのか？」

石瀬が驚きの声を上げた。

「明君も伏見先生と同じように、G細胞とメタボルバキアの影響下に同時にあるんだ。

テトロドトキシンにすら順応してしまうような適応力があるなら、

麻酔薬なんぞ何の役にも立たんだらう」

八幡の言う通り、明は目を覚ますと、すぐにハッキリ意識を取り戻したように見えた。

通常、全身麻酔後の患者は、もうろうとした状態がしばらく続くはずであるが、そのような様子はみじんもない。

「八幡先生！！早く、父さん……………父を助けに行かなくては」

「なんだって？君は、事の成り行きを把握しているのかな？」

八幡は驚いて問い質した。明は手術後、ずっと意識が無かったのである。シュラインのことを含め、周囲の状況を知り得るはずがない。

「はい。体こそ動きませんでしたが……………ずっと意識はありました。ぼんやりとですが、目も見えていました」

「なんと……………そうだったのか。それもG細胞の影響なのかも知れんな……………」

だが、ならば理解できるだろう。今はどうしようもないんだ。伏見君のいるブロックに入るには、シュラインを倒す方策を立ててからでないといけないだ」

「……………じゃあせめて、向こうの様子を見せてもらえませんか？」

「そうだな。シュラインの様子を監視する意味でも、モニターを見てみる必要がある。東宮君、たのむ」

再度、東宮がモニターを調整すると、今度は第二ブロックの様子

が映し出された。

「ああっ！？ カイ！！」

モニターを見た紀久子が叫んだ。あれほど優位に戦いを進めたいはずのカイが血まみれになっていた。スピードも半減してしまっている。

「伏見君は！？ 伏見君はどこだ！？」

しかしモニターの視界は狭い。伏見の姿は見えなかった。

「シユラインが動物を分離して攻撃を始めたようだ。見てください。カイの体に何か食いついている」

干田の言う通り、カイの体の数力所に、ネズミやイヌとおぼしきものが噛みついてぶら下がっているように見えた。どうやら、隙を見つけて自分から動物を分離することに成功したらしい。

「父は……父さんは？」

絶望的な明の声が響いた。

第二ブロックがモニターされる数分前、つまり、隔壁が閉じた直後、シユラインは戦法を変えたのだった。

体から十数匹の動物を分離して、カイと伏見を翻弄し始めたのだ。

「くくくく。どうだ？ こうして分離すれば、一頭一頭のスピードは、私一人よりもはるかに早くできる。」

「カイ！ 大丈夫か！？」

数匹の動物の突撃をまともに食らって、つんのめるように倒れたカイを、伏見が助け起こした。

すると、動物達を完全に分離し、美少年の姿にもどったシュラインが、ほとんど手足を動かしたとも見えないのに、すっと一瞬で目の前まで移動してきた。

そして倒れたカイと伏見をのぞき込むようにしながら、にやりと笑う。

「これで、私の勝ちだ」

「なんだと？」

「そのサルは、もう私の細胞に感染したわけだ。

完全に意識を乗っ取るには少々時間を要するが……戦闘不能にするには、数分で充分。伏見君一人では、私と差し違えることも出来まい？」

「く……」

「あきらめて、私の一部になれ。

そうすれば、何の悩みもなくなるのだ。お前の中のG遺伝子とメタボルバキアをも取り込めば、G本体との融合も可能になるだろうしな」

シュラインがしゃべっている間、カイは歯をむき出し、怒りを露わにしながらも、手足に痙攣を起こし次第に動けなくなっていく。

「カイ。巻き込んですまなかつたな。最後の手段を……使わせても

らっ」

伏見は、そんなカイの体をそつと撫で、優しく話しかけた。

「な……なんだと!？」

伏見の言葉にシュラインが警戒して飛び退き、伏見たちから数m離れた。

その時突然、館内スピーカーから明の声が流れてきた。

『父さん!! 聞こえたぞ。最後の手段って、どういう事だ!？』

「明!? 明なのか? 全身麻酔中じゃなかったのか?」

『心配で目が覚めちまったんだよ……もう少ししたら、助けに行くから……バカなマネはやめてくれよ……!!』

「最期に、おまえと話ができるのか。ありがたい」

『最期なんて……言つなよっ……!!』

「よく聞け、明。父さんがやってしまったことは罪だ。

お前の命を助けるためとはいえ、やってはいけないことをやってしまった。シュラインの罠にはまったのも、心の隙があったからだ」

『だから、オレは恨んでなんかっ……!!』

「ありがとう……だが、罪は罪、償えるチャンスがあるなら、償うべきだ。」

「何をする気だ……貴様!？」

シユラインの碧い目が、射すくめるように伏見をにらみつけている。しかし、伏見のやるうとしていることが見えないため、安易に近づくこともできないでいるようだ。

「野暮だなシユライン? 親子で最期の会話くらいさせろ」

「ふふ……諦めたということか? 言っておくが、私に取り込まれてから何かしようとしてもムダだぞ?」

『ヤツの言う通りだ。伏見君!! なんとか、逃げるか隠れるかしてくれ!』

スピーカーから、今度は八幡の声が流れた。

「八幡先生……すみませんが、そんなことをしても、それこそ、小動物を分離して放てるシユラインには通用しないでしょう?」

『じゃあ、どうしようと言っただね!？』

「……見ていてくだされば分かります……それより、明!! 聞こえるか?」

『……ああ。聞こえるよ。父さん』

「お前は、自分が正しいと思うように生きろ」

『父さん……』

「あまり悲しむな。父さんは、一足先に母さんのところへ行くだけだ。母さんとお前のおかげで、本当にいい人生だった。ありがとう」

『……………待つて…くれよ…………』

「もう思い残すことはない……………シュライン、最期だ」

「くくく……………どうしようというのだ？」

次の瞬間、伏見はいきなりシュラインに背を向けて走り出した。突然のことに意表を突かれ、シュラインの周囲に展開した動物たちも反応できない。しかも、伏見の身体能力は常人の数倍に強化されているのだ。あつという間にシュラインを振り切った伏見は、十数m離れた部屋の前まで来た。

「ここに、あつたはずだ」

伏見は、ドアの前に立つと掌紋認識装置に手をかざした。ドアは瞬時に伏見を認識して開いた。部屋の表示には、「DANGER」とある。

室内は一見、のっぺりとした無機質な内装であるが、防爆処理を施した危険物倉庫のようだ。その中でもさらに嚴重に金庫に入れられているもの。それが伏見の目当てのものだった。網膜パターン認識装置に目を押し当て、金庫から取り出した物を持って部屋を出る。

「何をしている!？」

部屋を出た伏見の前に、再び動物たちを取り込み、醜い肉塊の姿となったシュラインが立ちはだかった。伏見の手には、たつた今金庫から取り出した、電子起爆装置付の円筒形の装置が握られている。

「ほう……なるほど、地質調査用のダイナマイトというわけか。だが、そんな少量では、今の私は殺せないぞ?」

「ふん。誰がお前に使うと言った?」

「なんだと?」

「コイツはな、こつするんだ!!」

伏見は、起爆スイッチをONにすると、それを胸に抱きしめたまま、廊下に点在しているダストシュートに体当たりしていった。

ダストシュートからのゴミ移送パイプは、ラボの外の海中を通っている。つまり、もっとも壁の薄い場所なのだ。以前、そこからの海水漏れで研究所全体が一時避難したこともあるほど、弱い部分であることを伏見は知っていた。

「やめるお!!」

伏見のやるうとしていることに気づいたシュラインの、悲鳴に近い叫びが響き、轟音がその余韻を埋め尽くしていった。

「第二ブロック……浸水のようです」

東宮が沈んだ声で報告した。

「なんてことだ……ダイナマイトで自分の肉体を破壊し、シュラインに取り込まれないようにするばかりか、外壁を破壊して浸水させ、深海の水圧でヤツにとどめを刺すとは……」

八幡が頭を抱えて、モニターの前でデスクに座り込んだ。

「父さん……………」

明が呆然とつぶやいた。

§10 守護神サラマンダー

§10 守護神サラマンダー

「……浸水警報により、第一・第二ブロック間の隔壁、作動しました」

白山が報告する。

「明君、伏見先生は立派な方だった。彼のおかげで、世界が守られたと言ってもいい」

干田が明に慰めの言葉をかけた。しかし、明は後ろを向いたまま答えた。

「よしてください。父が守りたかったのは、きっと世界なんかじゃない……」

「そう……かも知れんな」

ぼつりと、八幡が言った。

それ以上は、誰も声を発することが出来ず、しばらくの間沈黙が続いた。

その時、モニターをいじっていた東宮が、素っ頓狂な声を上げた。

「ひゃっつ……な…何だこりゃ!」

画面は、外部モニター、つまり研究所の外に設置されたカメラの

映像が変わっていた。

「ば……ばかな、こんな状態で、まだ生きているというのか!？」

ウィリアム教授が驚きの声を上げた。

モニターに映し出されていたのは、水圧で押しつぶされた第2ブロックの姿だった。

外部モニター付属の強力な投光器は、圧壊したドーム状の建物を映し出している。

しかし、そこには建物の残骸だけでなく、潰れた瓦礫の隙間から、うねうねと真っ白な触手が伸び、這い出すように周りの瓦礫に巻き付き、うごめいているのが確認できた。

「この化け物は……シユラインなんですね？」

明の目に怒りの色が浮かんだ。

「ヤツはいったい、何をしているんだ？触手状になっているようだが……」

「待ってください。どうもライトの周囲や画面上に深海生物がまとわりついて、まともな映像が来ません」

東宮は、カメラの角度や照明を変えて、なんとか映し出そうとしているが、どうしても深海生物の白い影が写り込む。

「いいえ、様子がおかしいです。これまでこの海域で、こんな高密度で深海生物が集まってきたことなどないはずですよ……これは……」

紀久子が言うように、平坦でアクセントの少ない海底であるこの海域は、もともとあまり生き物が見られない場所であった。

「崩壊した第二ブロックの泡に誘われたんじゃないのか？」

ウィリアム教授が言ったが、八幡が否定した。

「いや、どうやらヤツが呼び寄せているようだ。見たまえ」

「う、これは……食っているのか？」

シユラインの白い触手が、近寄ってきた細長い深海魚を巻き取って体内に引っ張り込む光景を見て、白山が驚きの声を上げる。

「食っているだけじゃない。見る、自分の体にエラ状の部分を作り出そうとしている。」

水中呼吸に適応しようとしているんだ。あのままだと、そのうち泳ぎ出すぞ」

すでにハッキリとは見えなくなっていたが、わずかに映し出された体表面には、深海ザメのエラ穴を思わせる、細い切れ目がいくつか並んで、規則正しく動きだすのが見て取れた。

「いったいどうやって、こんなに深海生物を集めたんでしょう？」

「いずもが八幡に聞く。」

「臭いか音波だろう。魚だけでなく、甲殻類や軟体動物も集まっているところを見ると、臭いの線が濃厚だな」

「ヤツが、分離させて襲ってきた生物は、すべて陸生ほ乳類だった。それがいきなりこんな深海の高水圧にも適応しようつていうのか」

干田が言う。たしかに、あまりにもこれまでとはかけ離れた性質の変化だ。

「深海に投げ出され、ギリギリに追い詰められたことと……やはり伏見君のG遺伝子を取り込まれてしまった可能性は否定できないな」

「これは、まずい。シュラインが深海中でも生きられるなら、次に狙うのはG本体だろう。」

G遺伝子の取り込みに成功したかどうかは不明だが……もし、G本体と融合した場合、今のヤツのバイオマスならば、Gの欠損部分を補完することが出来るかも知れん」

八幡の声は焦っていた。

「それが、これだけの深海生物を集めた理由でもあるのでしょうかね」

「ふむ、なるほど。あの化け物……シュラインにとどめを刺すか、Gの遺体を破壊するしか手はないということだな？」

「ウィリアム教授、何か手段があるのですか？」

ウィリアムの妙に自信のありそうな態度を見て、干田が驚いた表情で聞く。

「ここを何処だと思っているんだね。ウィリアム教授の機械工学研究室だぞ？」

本来の仕事は、Gに対応できる機械兵器を開発することだ。対巨

獣用の戦闘兵器なら用意がある………まあ、試作品ではあるがね。
カイン、外部ハッチへ行こう」

「Yes . プロフェッサー」

カインが奥のスライドドアを開けると、そこはちょっとした工場並みの広さのある空間だった。

ウィリアム研究室の作業機械製造工場であり、格納庫でもある。それにしても、深海とは思えない広さと設備の充実である。変わった形の探査船が一機と、いくつかのメカが並んでいる。

ウィリアム教授は、人型の作業機械の前で止まった。サイズは身長にして三mくらい。搭乗型のロボットにしては小さく、潜水服にしては重厚である。同じものが二機置いてあり、それぞれ、赤と青を基調に塗装されていた。

「これが、当研究室の開発した最強のパワードスーツ、サラマンダーとワイバーンだ」

「こんな小型機で、今のシュラインに有効な攻撃を与えられるのですか？」

「有効どころではないよ。このスーツには、高電圧で神経を焼き切るショックアンカーや、耐水圧ミサイル、ポイズンアローなど……小さくとも、海底でも使えて巨獣を殺傷できる兵器がいくつも付いている。まさに、この研究所の守護神と呼ぶに相応しい」

「待ってください、ウィリアム教授。」

シュラインは通常の生物……いや、これまでの巨獣とは違います。電撃で細胞分裂を促進してしまう危険もあるし、破壊して細胞を飛び散らせるのはもっとまずい。それに、毒物が効かない可能性は伏

見君が示してくれました。武器をよく選択しないとイケません」

八幡の言うのももっともだ。

「それに、第一ブロックの惨状も心配です。早く処置しないと、死者が出るかも知れません。いや、もう出ている可能性があります」

石瀬が心配そうに言う。

「大丈夫だ。ソレならサラマンダーの武器を pressurized liquid nitrogen warhead に限定シテやればイイ。

ソレと、第1ブロックへは、submergence transport vehicle のシーサーペントで、攻撃とは別に救助隊を向かわせれば、いいダロウ」

カインの、早口の英語混じりの発言は、ウィリアム以外にはよく聞き取れなかったようで、八幡を含めた全員が首をかしげた。

「え？プレッシャ……って何ですか？」

いずもが不思議そうに聞く。

「pressurized liquid nitrogen warhead とは、高圧液体窒素弾、PLN 弾とも言うおうか。水中で液体窒素を反応させ、巨獣を冷凍して封じ込める武器だ」

「なるほど、では submergence transport vehicle というのは？」

「それは、そこにある深海作業艇のことだ。シーサーペント、最大8人乗りの中型潜水艇で、安全性は折り紙付きだよ」

「つまりカイン。君の言っているのは、シユラインは液体窒素弾で凍らせれば、妙な影響を及ぼすことなく捕獲できるし、第一ブロックへの救援は攻撃とは別に行けばいい、ということか」

「ソウダ」

「だが、誰がその役をやる？」

「サラマンダーに乗るのは、ぼくダ」

「カイン、君が？」

「ぼくハ、サラマンダーの開発者ダ。もつとも上手く扱えるのは、当たり前ダロウ。ソレに、今、唯一availableな、サラマンダーの体格は、ボク個人に合わせテある」

「唯一？ もう一機は使えないのかね？」

「ワイバーンの起動は出来ルが、adjustmentも済んでいないし、命綱もケーブルもconnectされていないカラ、危険度が高いし、通信も出来ナイ」

「では、シーサーペントの方は……」

「……私が行かなくては、治療が出来ないでしょう」

「石瀬が名乗りを上げた。」

「操縦は、私がやります」

もう一人、名乗り出た予想外の人物を見て、その場の全員が息を呑んだ。

「バ……バカな。松尾君、怪我人の君にそんな役をさせるわけにはいかん。ましてや君は女性だろう」

紀久子の強い視線を見返しながら、八幡は少しうるたえ気味に言った。

「女だからって特別扱いしないで下さい。

私はこの中で誰よりも、ウィリアム先生の作ったサンプリングロボットのコントロールには慣れていきます。私以上に、この潜水艇をうまく使える人間はいません。それに、肩の怪我は大丈夫です。操縦には影響ありません」

真剣な表情で言葉を続ける紀久子の意思は固そうだ。

だが、その様子を見つめながら、明は、まるで心臓をわしづかみにされたような不安感を覚えていた。

水深2000mの深海、と一口に言っても、そこは人間にとって危険きわまりない環境である。わずかな機体の変形で、小型潜水艇など一気に圧壊してしまうかも知れない。

そうでなくとも、機器の故障やトラブルで身動きできなくなれば、その先には死しかない。また、深海の海底にも強い海流がある。もし流されでもしたら、遺体すら回収できないのだ。

しかも、シユラインという敵もいるこの海底は、それ以上に危険な場所でもある。どうしても、紀久子を行かせたくなかった。

「ま……待つてください。その……操縦は、松尾さんでなくとも、誰か他の人でも、やれるんじゃない……」

「明君は、黙っていて」

紀久子の厳しい声を聞いて明は黙った。向こうを向いていて表情は見えないが、こんなに冷たい紀久子の声を聞いたのは、初めてだった。

「この海底ラボは、外から侵入するには出来ていないはずですが、一の時を考えて、外部にもハッチの解除スイッチがあるはずですが、それを探し当てて、解除するのは、私以外には難しいと思います」

紀久子はそう言ったが、本来ははずもの方が、サンプリングロボットの操縦経験は長かった。

東宮、白山にも操縦そのものは可能だったし、なにより機械工学研究室のメンバーには、さらに機械の操縦に長けた者がいるかも知れなかった。

しかし、深海とシユラインへの恐怖のためか、誰もがわずかにうつむいたまま、一人も代わりを申し出る者はいない。

明は、その重い空気を理解して、唇を噛んだ。

「いや、しかし……待ちたまえ」

「待てません。今は、私たちの命も、第一ブロックの人達の命もかかっている緊急事態です。一刻も早く動かなくてはいけません。男女の区別無く、成功確率の高い人選をすべきじゃないですか？」

紀久子はまっすぐに八幡を見つめている。

「……分かった。だが、もう一人、搭乗者をこちらで決めさせてもらう。干田君、君が行ってくれないか？」

八幡は、防衛省所属で、潜行艇の搭乗経験も、巨獣との戦闘経験もある干田を指名した。

「無論です。私以外には戦闘のサポートはつとまらないでしょうからね」

§11 シュラインVSサラマンダー

§11 シュラインVSサラマンダー

「カイン？聞こえるか」

「OK」

パワードスーツ・サラマンダーを着込んだカインからの返事が通信機から流れた。

格納庫は、各機の足下に外部ハッチに直結するシューターが付いていた。カインは、外部ハッチに到達し、深海へと進み出そうとしていた。

「通信ケーブルに引っかからないように気をつけてくれ。命綱を兼ねたケプラー繊維で被覆してある。スーツに絡んだら切ろうにも切れないぞ」

ウィリアムがカインに声をかける。

「ラジャー。もちろん、分かっていますよ」

「君がシュラインにPLN弾を命中させ、完全に動けなくしてから、シーサーペントが出る。そうしたら、すぐにシーサーペントの護衛に回って欲しい」

「OK。簡単な作業だ」

カインは、圧壊した第二ブロックへと向かった。

「ナンダ、これは、また変形しているノカ？」

深海の暗闇に包まれた外部カメラの視界は狭い。トライデントの強力な投光器によって浮かび上がったのは、白い肉塊であった。つるんとした表面は、まるでつきたての餅を思わせる。

「攻撃前に、全体像を見なくてはいけない。エコーロケーションシステムをONにしてくれ」

ウィリアム教授が、通信で呼びかける。

エコーロケーションシステムは、超音波を全方位に発し、反響をコンピュータ解析してそのまま画面上に画像として映し出す。暗闇であっても、真昼のように周囲の状況を画像として見る事が可能であった。

「ラジャー」

エコーロケーションシステムがONになると、シュラインの全貌がモニターにハッキリ浮かび上がった。

先ほど外部モニターで見た時よりもさらに巨大化し、直径にして5〜6mはあるだろう。

相変わらず、周囲には深海生物が群がり、シュラインの血肉になっっているようだった。身動きもしないのは、死んでしまったのか？いや、体表面にいくつかの穴が空き、そこから海水を取り込んで吐き出しているように見える。すでに、水中呼吸が出来るようになりつつあると思われる。

「急いでPLN弾ヲ撃ち込ム」

「近すぎると、氷結に巻き込まれるおそれがある。距離を10m以上とるんだ」

「分かってイル」

カインは、シュラインの周囲を慎重に回りながら連続してPLN弾を発射していった。

スーツの肩部から発射される自噴式のPLN弾は、小型の魚雷といったところだ。最初の一発で、シュラインの体表の半分近くが、周囲の海水ごと凍り付いていく。

カインは三発のPLN弾で、シュラインの周囲すべてを凍らせた。

「す、すごい。圧壊した第二ブロックごと凍っていく。これならヤツも身動きできんだろう」

八幡は唸った。

「では、発進します」

通信機から、紀久子の声が聞こえた。

「うむ、気をつけて行ってきてくれ。くれぐれも、無理はするな」

「大丈夫です」

外部ハッチを出たシーサーペントは、いったん沈みかけてから、スクリュアの回転数を上げて進み始めた。後方部分には、通信ケーブル兼用の命綱が繋がったままだ。ウィリアム教授が自慢するだけあって、かなりの速度である。3ノット以上は出ているだろう。

「松尾君、もう少し速度を落としたまえ。慎重にいくんだ」

「いえ……低速航行しているつもりなんです……サンプリングロボットと違ってスロットル調整が、すごくタイトで……」

「Miss・松尾。」

シーサーペントには低速航行用のスクリューが別にあるんだ。説明不足で申し訳ない。メインレバーの右下に赤いボタンがあるだろう？それが切り替えスイッチだ」

「あ、これですね？分かります」

「ウィリアム教授、その他の特殊な操作はありませんか？」

「大丈夫だ。あとは、サンプリングロボットと基本操作は変わらない。それより、もう第一ブロックの外壁に着くぞ。外部ハッチの場所を特定してくれ」

紀久子の隣に搭乗した干田が、識別信号の発信スイッチを押すと、シーサーペントの船首にある発光ダイオードが一定のリズムで点滅し始めた。

「見つけました」

第一ブロックの外壁部分に、シーサーペントと同じリズムで点滅を始めたダイオードが見えた。

外部ハッチの脇には小さな回転つまみがあり、それをマニピュレーターで回すとドッキングポートが開く。

しかし、機械工学教室の大きな外部ハッチと違って、第一ブロッ

クのポートは狭い。小型潜水艇からブロック内に乗り移るためには、その狭いポートに正確にポセイドンの船首を接続しなくてはならない。

「成功……しました」

通信機から流れる紀久子の声を聞いて、八幡たちは歓声を上げた。

「よし……あとは、第1ブロック内の人達を治療して、このブロックから全員脱出するだけだ……」

「SHIT!! こいつ……そういうツモリだったノカ!!」

八幡がほっとしたように、言ったとたん、通信機から切羽詰まったようなカインの声が流れてきた。

「どうしたんだね!? カイン？」

ウィリアムが、八幡からひったくるように通信マイクを奪って話しかけた。

「丸くなっていたのは……完全に凍らされなかったためと……コレは……
…chrysalis!!」

「chrysalis? サナギだった？」

「うわぁ!! なんだコレ!?!」

サラマンダーから送られてきた、エコーロケーションモニターを見た東宮が、大声を上げた。

「ウミヘビ？ いや、ウナギか？」

そこには、凍り付いた丸いシユラインの下部から、まるで寄生虫でも這い出してくるかのように、細長く白いものが生み出されてくる映像が映し出されていた。

「何か、あつたんですか！？」

異変を察知した紀久子の声が、通信機から流れる。

「いいんだ松尾君、こちらはこちらで何とかする。君たちは、第一ブロックの人々の救助に全力を尽くしたまえ」

八幡はそう言ったものの、次に打つ手が見つからずいた。こうした状況に臨機応変に対応するには、経験も知識も不足しているのだ。

「司令室！ 聞こえるか？ PLN弾の残弾は、あと7発だ。ナンとかヤツの全身を凍らせしてみる」

カインは自己判断で、攻撃を開始するようだ。様子が完全につかめず、的確な指示が出せない八幡は、唇を噛んだ。

「頼む。万が一にも、シユラインを逃がすわけにはいかないんだ」

「OK、プロフェッサー八幡……」

しかし、その返事が終わらないうちに、カインの声は悲鳴に変わった。

「U…wow!! What!! コノ、Daemon!!」

動揺は、モニターを見ていた者全員にも伝わった。

「うわあー!!」

「ひゃあー!!」

「Oh! GOD!!」

室内に様々な悲鳴が入り乱れる。

モニターには、シュラインの顔……巻き毛の美少年の顔が大写しになっていた。

真っ白なヘビのような、グロテスクな細長い体の先端に、端正な少年の顔。

それが、不気味な微笑みをたたえて、こちらへ迫ってくるのだ。

「SHIT!! コイツでも、食ラエー!!」

「STOP!! やめるんだ! カイン!!」

カインがPLN弾を発射すると、ウィリアムが叫んだのは、ほとんどの同時だった。

「ク……FUCK!!」

それから数秒も経たずに、カインの悔しそうな声が、聞こえてきた。

シュラインの顔は、凍り付かせることが出来た。しかし、サラマ

ンダーもまた、凍った海水に固められ、身動きが取れない状態になっていた。

それに対してトライデントの固まった氷ごと、顔の部分をあっさり切り捨てたシュラインは、深海中をのびのびと泳ぎ始めた。

「モンスターめ!!」

カインの目の前には、あざ笑うような表情のまま、凍り付いて張り付いたシュラインの顔がある。シュラインの顔は擬態だったのだろう。至近距離に顔を近づけてきたのは、畏だったのだ。

「リュグウノツカイ……まるで深海魚だ」

ウィリアム教授が、今のシュラインに酷似した、深海魚の種名をつぶやいた。

その時

“………えるかね？諸君”

「な………なんだこれは!？」

白山の声が響く。だが、耳を押さえて訝っているのは、そこにいた全員だ。

“聞こえるかね？諸君”

その声は、全員の耳に届いていた。海中にいるカインにも、第一ブロックに乗り移った干田達にも……

「シュ………シュラインの声？」

いずもが、驚きの声を上げる。

“これでチエックメイトだ。私は深海に適応した。君たちにはもう、打つ手がない”

「どういうことだ？ 何故、ヤツの声が聞こえる!？」

「……おそらく……生体電磁波だ。我々の聴覚神経に、直接電気刺激を与えて、まるで声が聞こえているようにしているわけだ」

呆然としながらも、八幡が分析した。

“正解だ。八幡教授、もしかすると君なら、これが何を意味するか分かるかも知れないな？”

「脳の働きはすべて電気信号……聴覚同様に、視覚、嗅覚、触覚、味覚……つまり我々の五感のすべてを、操ることも可能というワケか……」

“エクセレント!!”

さすがは、シートピアを代表する細胞学の権威だ。要するには、わざわざ細胞を植え付けなくとも、君たちを操ることなど造作もないということだ。だが、細胞を植え付けた場合と違って自意識があると苦しいぞ？ 全員、あきらめて私の一部となることをお勧めするよ”

「違います!!」

紀久子の声が響いた。

「コイツの口車に乗ってはダメです!!」

そんなことが出来るなら、どうしていきなり私たちを操らないんですか!？ 複雑な脳の電気信号を、そこまで細かく操るなんて、出来るわけがありません。きつと………声を聞かせるくらいが限界なんです」

“ 生意気な小娘が。邪魔を………するな!! ”

苛立ったようなシュラインの声が響き渡った次の瞬間、全員の脳に直接、ゴゴゴと暴風のような悪意のイメージが吹き付けてきた。

「いや……ああああ!!」

紀久子の悲鳴があがった。

“ どうだね？ 私は生体電磁波に、ある程度指向性を持たせることも可能だ。恐怖のイメージをぶつけただけでこうだ。これでも、生意気な口がきけるかな？”

「あ……ああああ!？」

八幡達の脳へのダメージはかなり静まってきたが、紀久子の悲鳴は収まらない。

“ お前はそのまま………廃人にしてから、吸収してあげよう ”

モニターには、ドッキングポートに船体前部を固定していた状態のシーサーペントが映っている。そこへ、ふわふわと泳ぎながら、優雅とも言える様子で深海魚の姿をしたシュラインが近づいていく

のが見えるが、こちらからでは、どうすることもできない。

「どう……したらいいんだっっ!!」

目の前のデスクに両手を叩きつけ、八幡が悔しそくに叫んだその時、突然、モニターに映っているシュラインが、何かに引つ張られたかのように、引き戻された。

“な……何!!……”

シュラインの声が響き渡ったかと思うと、まるで電話線が切られたかのように、聞こえなくなった。

「八幡君、ワイバーンが消えている………いったい誰が……」

ウィリアム教授の慌てた声が響く。見ると一機残っていたはずの深海用パワードスーツのうち、青を基調にした方が無くなっている。何者かが着込んで、シューターを作動させたに違いなかった。

「いったい誰なんだ？ あのスーツは未調整な上に、通信ケーブルも付いていないはずじゃなかったのか？」

「明君……明君がいません!!」

一人姿の见えない明に、いずもが気づいた。

「………これを見てください!!」

東宮の声に、再度モニターを見ると、細長い深海魚の姿をしたシュラインの一部を、つかんで引きずるようにしながら、シートピア

から離れていく青いパワードスーツ、ワイバーンが映っている。

海中では、重量は関係ないとはいえ、スーツの数倍の大きさの暴れる生物を、引きずっていくとは、相当の推進力だ。

「な……なんだあの形状は！！」

だが、モニターを見ている八幡が驚いたのは、スーツのパワーではなかった。なんと、シュラインが細長く見えたのは、一部しか映っていなかったためだったのだ。

シュラインの全体像は、まるでクモヒトデのように丸い本体からいくつかの長い触手が生えているという奇妙な姿をしていた。だが、海中での遊泳力をほとんど持たないのか、トライデントの力に抗えず、うねるように暴れているだけだ。

「く……そうか、我々は、明君に助けられたようだ。シュラインの作戦に気づきもしないとは……あまりに愚かだった」

ウィリアムがつぶやいた。

「ど……どういことなんです？」

モニターの様子に釘付けになりながら、おずおずと、白山が尋ねた。

「簡単なことだ。海中を電磁波が伝わるわけがない」

それを聞いて、八幡は自分の頭をひっぱたいた。

「そんなことにも気づかないとは、私はなんたる間抜けか！！」

そうか。ヤツは本体を外部ハッチから侵入させて生体電磁波を発

し、モニターには深海魚に擬態した細長い部分を、まるで本体のように見せて、どこに逃げてもヤツに操られてしまうような錯覚をさせていたんだ」

「じゃあ……………明君はそれに気づいて……………」

いずもがつぶやく

「八幡先生！！ 明君を助けに行かなくては！！」

紀久子がシーサーペントを、第一ブロックの外部ハッチからドッキングオフさせた。

「ダメだ！！ 行くな！！」

そこへ、干田の声が割り込む。

「干田君？ 第一ブロックの管制室にたどり着いたのかね？」

「はい、こちらはひどい状況でしたが、死者はいません。今は、石瀬君がなんとか治療を行っているところです。松尾君、気持ちは分かるが、明君を助けに行つてはいけません」

「どうして！？ どうして助けに行つてはいけないんですか！！」

紀久子の声は、悲痛だ。

「よく考えたまえ！ 兵器を持たないシーサーペントで彼等に追いついたところで、どうやってシュラインを倒すんだ？」

もし戦闘に巻き込まれて破損でもしたら、第三ブロックの八幡先

生達は、どうやって第一ブロックへ移動するんだ？

もし救助が来るまで日数が掛かればどうなる？ 今つながっている、電気や酸素も、どれだけ保つものか……明君や君の命だけの問題じゃないんだ。」

干田の言うことは、たしかに正しい。

「でも……じゃあ、命がけで私たちを助けてくれた明君を、このまま見捨てるって言うんですか!？」

「今……彼を助けに行くことは、彼の行為を……思いを、ムダにする結果になる。そう言っているんだ……」

「どうしても……？ どうしようも……ないんですか……？」

紀久子の声は、涙声に変わっていた。

「なんとか、明君がシュラインをふりほどいて、こちらに戻ってくることが祈ろう。君は、そのためにも、そのままの状態で彼を待ってくれ。」

私たちはなんとかカイン君の回収と手当をする」

「……分かりました」

八幡の言葉に、紀久子は小さな声で答えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7424z/>

巨獣黙示録 G

2012年1月14日09時48分発行